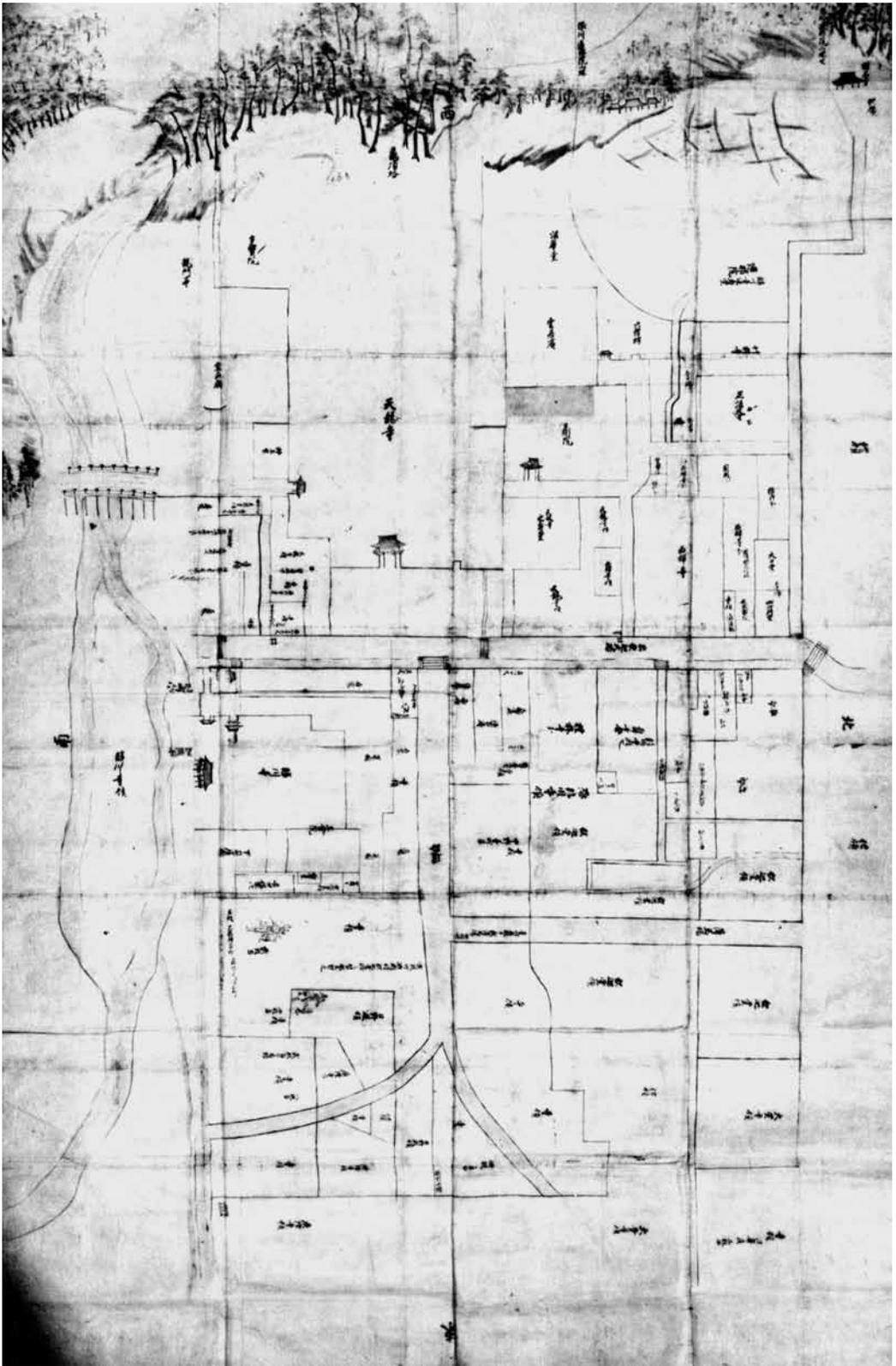


りんせんじ
臨川寺旧境内遺跡発掘調査報告

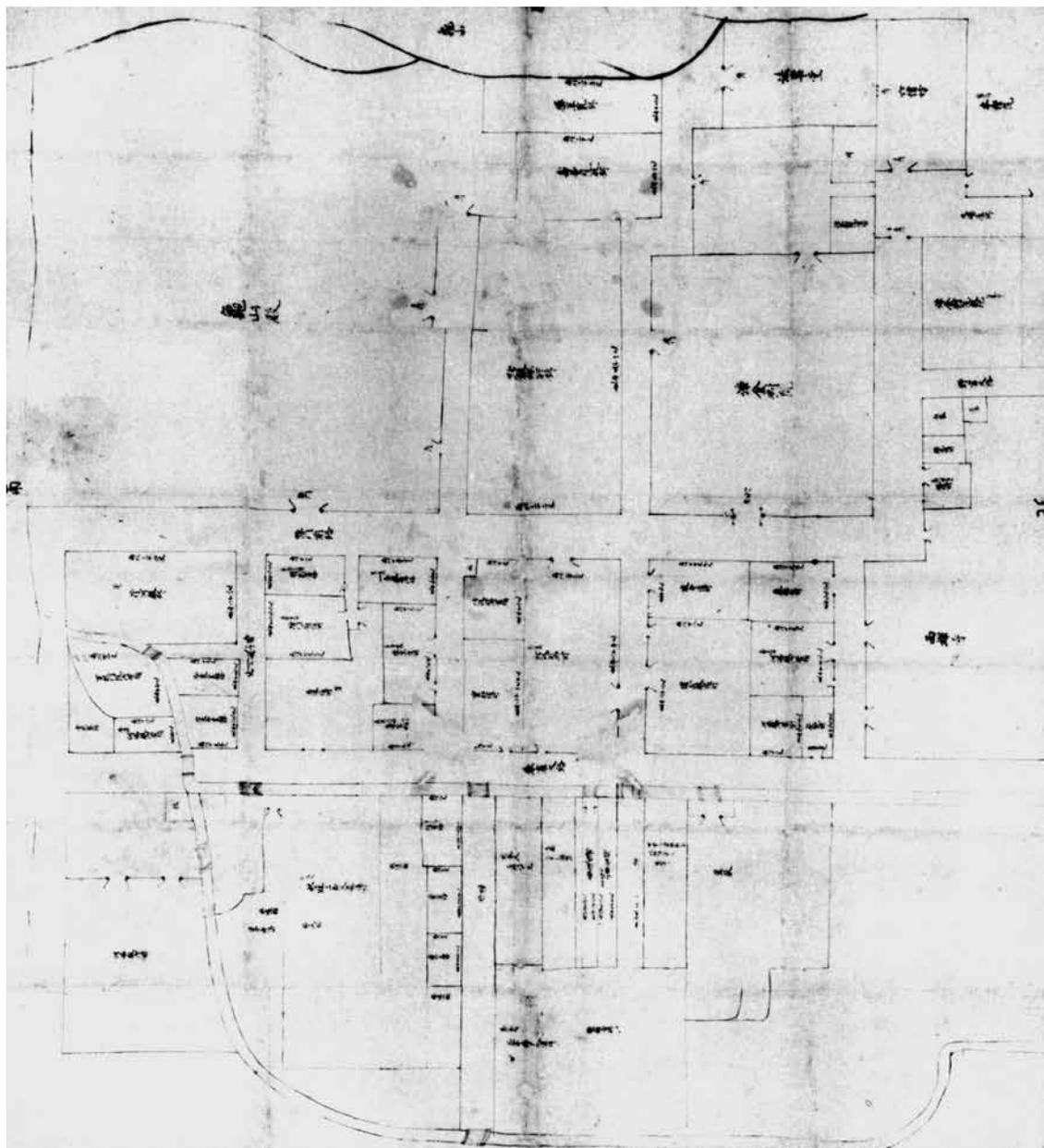
京都市埋蔵文化財研究所調査報告第4冊

1978

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



臨川寺領大井郷絵図



往古緒郷館地之絵図（龜山殿絵図）

序

京都市埋蔵文化財研究所が設立されてから、臨川寺境内の発掘調査が行われたのは、ここに報告したものが始めてである。しかし、このあたりが史跡・名勝嵐山の枢要な地を占めていることから、ここ10年の間には異常な変貌があつて、寺が寺であることはなく、境内地を割いて道路がつくられ、観光客を相手とした施設が造られた。特にここ4、5年は、そのような施設造成に伴う事前の発掘調査が行われたのである。その多くに、臨川寺としての室町時代の遺構である庭園部分の出土をみている。ところで、それより以前の深いものの調査については、浅い所でみつげられた遺構の破壊を招くものとして、特別なもの以外はひかえていた。

しかし、その室町時代の遺構面が比較的価値が少ないとみられるなら、それまで掘り下げることがなかった土層を掘り下げて、それ以前の状況をさぐる必要があるのを感じていた。そのように感じるのはこの境内が、本文中でも述べるように「嵯峨庄田図」によって示される南方に隣接し、その東は小山田里と推定できるからである。その条里によって区画されたものが「臨川寺領大井郷絵図」とどのように関係するかの手がかりを発掘調査で得られると期待をかけていたのである。

しかし、今回は調査の位置と調査範囲が狭いということで、十分な成果を挙げることはできなかった。次の機会に周辺を調査するようなことがあるなら、これを基にして導かれるだろう。いずれにせよ臨川寺がここに位置していることは「嵯峨庄田図」に関係することとみれば、嵯峨全般ひいては葛野郡へ発展して考察する重要な基盤を得たものと考えられる。

最後にはなつたけれど、この調査に多大な援助を賜つた方々に、感謝の意をささげたい。

1978年 12月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 杉 山 信 三

例 言

- 1 本報告書は、昭和 52 年 (1977) 2 月 1 日から同年 4 月 8 日にかけて、京都市右京区嵯峨天竜寺造路町 30-11 番地の臨川寺旧境内において当研究所が行った発掘調査の成果をまとめた報告書である。
- 2 本書の執筆分担は次のとおりである。
第 1 章 1、2、4 吉川義彦 3 石井 望
第 2 章 1、2、3 中村 敦
第 3 章 1 吉川 2、3 石井
第 4 章 吉川、石井
英文要約は浪貝 茂氏に依頼した。実測図の作図・トレースは吉川、石井、中村が担当分野毎に行い、写真撮影は遺構の一部を除いて牛嶋 茂が行った。
- 3 本書に掲載した地図は、京都市長の承認を得て、同市発行の 2,500 分の 1 地形図を使用して調整したものである。
- 4 巻頭図版の絵図の掲載については、京都国立博物館の八賀 晋氏、難波田徹氏のご協力を得た。
- 5 本書で用いた遺構の分類記号は、奈良国立文化財研究所の使用例に従ったが、遺物の分類記号については本書独自のものを用了 (第 3 章参照)。
- 6 遺跡の断面実測図は、土層の堆積状況を示すために、遺物包含層あるいは埋土を分層して図示した。また標高は TP (東京湾海拔高) を使用した。
- 7 遺物実測図の復原部分は、破線あるいはスクリーントーンで示した。
- 8 実測図に示した方位は天測によって得た真北を使用している。
- 9 校正は調査課長浪貝 毅と小野ひとみが行った。

目 次

第1章 調査の概観	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査経過	1
(1) 調査団の構成	1
(2) 作業の経過	2
3 遺跡の沿革	4
(1) 臨川寺の沿革	4
(2) 遺跡の地理・歴史的環境	5
4 既往の発掘調査	6
第2章 遺 跡	11
1 遺跡の層序	11
2 遺構	12
(1) 平安時代～鎌倉時代の遺構	13
(2) 室町時代の遺構	13
(3) 安土桃山時代～江戸時代前半の遺構	15
(4) 江戸時代後半以降の遺構	16
3 小結	17
第3章 遺 物	19
1 土器類	19
(1) 平安時代～鎌倉時代の土器類	19
(2) 室町時代の土器類	20
(3) 江戸時代以降の土器類	24
(4) 小結	24
2 瓦甎類	27
(1) 軒瓦	27
(2) 丸瓦・平瓦	34
(3) 道具瓦	36
(4) 甎類	37
(5) 刻印	39
(6) 小結	39
3 石製品・金属製品	46
(1) 石製品	46
(2) 金属製品	47
第4章 総 括	48
英文要約	53

挿 図 目 次

挿図 1	調査状況	2
2	調査状況	3
3	平安時代～鎌倉時代の遺構	12
4	SD09・SD13 断面（南半・北半）	12
5	SK06	13
6	瓦器鍋・釜（1/4）	21
7	瓦器鉢文様拓影（1/2）	21
8	燭台	21
9	陶器高台	22
10	SK41 出土甕	25
11	土師器法量（単位 cm）	25
12	常盤仲之町集落跡出土軒丸瓦（1/3）	27
13	谷丸瓦	34
14	軒丸瓦・丸瓦寸法対照	35
15	平瓦タタキ痕（1/2）	36
16	伏間瓦・熨斗瓦・長方形有孔甎	36
17	方形敷甎	38
18	三角形敷甎	38
19	硯（S01 拓影 1/2）・石臼	46
20	鉄製刀子・鉄釘	47
21	銭貨（1/2）	47

表 目 次

表 1	遺構一覧表	17
2	軒丸瓦計測表（遺構・層位別出土数）	32
3	軒平瓦計測表（遺構・層位別出土数）	33
4	遺物観察表	51・52

写真図版目次

- 巻頭図版 1 往古諸郷館地之絵図
巻頭図版 2 臨川寺領大井郷絵図
図版 1 臨川寺付近航空写真
図版 2 遺跡 発掘区全景
図版 3 遺跡 1 A トレンチ西半部 2 SD08・SK20 周辺
図版 4 遺跡 1 近世土壌群 2 B トレンチ全景
図版 5 遺跡 1 SX01 2 SX01 瓦出土状況 3 SX01 東西断面
図版 6 遺跡 1 SD11 2 SK10 3 SK20 4 SD08
図版 7 遺跡 1 SK41 2 SK63 3 SK64 4 SK46 5 SK19 6 SK45
図版 8 遺物 土器類（土師器・他）
図版 9 遺物 土器類（陶器・瓦器）
図版 10 遺物 土器類（瓦器）
図版 11 遺物 土器類（陶器）
図版 12 遺物 土器類（磁器）
図版 13 遺物 瓦軋類（軒瓦）
図版 14 遺物 瓦軋類（軒瓦）
図版 15 遺物 瓦軋類（軒瓦）
図版 16 遺物 瓦軋類（軒瓦）
図版 17 遺物 瓦軋類（軒瓦）
図版 18 遺物 瓦軋類（軒瓦）
図版 19 遺物 瓦軋類（丸瓦・平瓦・道具瓦）
図版 20 遺物 瓦軋類（道具瓦）
図版 21 遺物 瓦軋類（軋）
図版 22 遺物 瓦軋類（軋）
図版 23 遺物 瓦軋類（成形手法）
図版 24 遺物 瓦軋類・石製品・金属製品

実測図目次

- 第 1 図 遺跡 遺跡位置図
- 第 2 図 遺跡 遺跡全体図
- 第 3 図 遺跡 遺跡断面図
- 第 4 図 遺跡 遺構（土壌実測図 SK46・10）
- 第 5 図 遺跡 遺構（土壌実測図 SK61・62・63・64・SX02）
- 第 6 図 遺物 土器類（土師器・陶器・磁器）
- 第 7 図 遺物 土器類（陶器・瓦器）
- 第 8 図 遺物 瓦甎類（軒瓦）
- 第 9 図 遺物 瓦甎類（軒瓦）
- 第 10 図 遺物 瓦甎類（軒瓦・他）
- 第 11 図 遺物 瓦甎類（軒瓦）
- 第 12 図 遺物 瓦甎類（軒瓦）
- 第 13 図 遺物 瓦甎類（丸瓦・平瓦）
- 第 14 図 遺物 瓦甎類（道具瓦）

第1章 調査の概観

1 調査に至る経緯

史跡・名勝嵐山の一角、右京区嵯峨天龍寺造路町30-11番地に出版健康保険組合の保養所が建設されることになった。この地は京都市指定の風致地区であり、臨川寺の旧境内の一角である。このため京都市文化観光局文化財保護課は工事に先立つ発掘調査を行うように指導し、原因者の合意のもとに実施されることになった。文化財保護課はこの調査を財団法人 京都市埋蔵文化財研究所に依頼するように指導した。このため、発掘調査の契約は京都市埋蔵文化財研究所と建設を担当する株式会社竹中工務店 京都営業所の間でかわされた。

発掘調査は建設予定地を全面発掘することになり、調査面積約1,300㎡、調査期間は昭和52年(1977)2月1日から同年3月20日までとなった。調査費用はすべて原因者が負担した。

2 調査経過

発掘調査は昭和52年(1977)2月1日から開始され、当初は同年3月20日に終了する予定であったが、期日までに必要な作業を終了することができないため、工事担当者との協議によって同年4月8日まで延長された。

(1) 調査団の構成

調査は研究所所長 杉山信三、調査部長 田辺昭三、資料部長 木村捷三郎の指導のもとに、調査員 吉川義彦、臨時職員 中村 敦、石井 望が実施した。以下に発掘調査・整理作業の参加者の氏名を記す。このほかに短期間の参加者及び作業員がいるが省略した。

調査参加者〈補助員〉

海老一郎、熊野宏道(以上龍谷大学)。井上慶一(追手門学院大学)。内田裕子、兼平被子、河端高文、卜田建司、高野峰明、高山龍博、建石志計基、中村嘉久、南院成美、松井 香(以上仏教大学)。稲葉のり子、井出節夫、占部比露子、大河内久子、佐藤淑子、高尾順子(以上京都市立芸術大学)。加藤教子、北村祥子(以上京都女子大学)。梅本靖典、小垂亮爾、大楽康宏、滝本淳司、長谷泰子、原 秀樹(以上奈良大学)。藤ノ井和彦(京都芸術短期

大学)。安井彰宏(京都産業大学)。真本芳治(近畿大学)。栄 睦夫(神戸学院大学)。吉村俊弘(花園大学)。青木 信、渋谷高秀、茂地純一(一般)。

調査協力者・協力機関

京都国立博物館 京都市史編纂所 (株)竹中工務店 田中司法事務所

(2) 作業の経過

1977・2・1～4・8

調査区は建物の敷地面積全面を対象としたため、AトレンチとAトレンチ南東のBトレンチに分かれた。

2月1日～3日 機材の搬入。調査区は、Aトレンチと、Aトレンチ南東のBトレンチを設定した。調査区の基本層序を確かめるため、試掘を行った。この結果、現表土から30～80cmは江戸時代以降の遺物を含むことが判明し、ここまで重機で掘削することにした。この作業は3日から開始したが、現場への進入路が狭いため、土砂の搬出に手間どった。

2月9日 重機による掘削と並行して遺構検出開始。発見された江戸時代以降の土壌を掘り始める。

2月11日 Aトレンチの大半の掘削が終了したのでBトレンチの掘削開始。

2月12日 Bトレンチ掘削終了。壁の清掃を行う。Aトレンチ東半の掘削を始める。

2月13日 機械による掘削はすべ

て終了。第2層の除去を開始。

2月18日 旧地主である田中司法事務所の人が現場を訪れ、これまで調査していた土壌が、以前は墓地であり、昨年10月に改葬した際のものであることが判明した。SK41はこのときの掘り残しである。

2月19日 本日までに第2層の除去、第3層上面の遺構検出を行ってきたが、輪郭が不明瞭であるため、第3層を掘り下げる。夜間に天測を行う。

2月28日 確認した遺構の新しいものから調査を開始する。SD06の西側の調査終了。

3月4日 各区の遺構の調査。SX01



挿図1 調査状況

の調査を行う。Bトレンチ第2層が掘り足りないことが判明し除去する。

3月8日 SK46発掘開始。SK10の瓦出土状況を写真撮影。Bトレンチの遺構の調査開始。トレンチ内のセクション除去のため、土層実測図作成。



挿図2 調査状況

3月9日 土層実測図作成継続。BトレンチをAトレンチにつなぐため北へ拡張する。

3月10日 SX01上層の発掘終了。SK19で土師器が多量に出土する。

3月11日 遺構平面実測のための割り付けを行う。完掘した遺構で切り合いのあるものの実測を開始。トレンチ内のセクションを除去。遺構を検出し、完掘する。

3月13日 SX01の調査継続。

3月19日 本日でAトレンチ第4層上面までの調査を終了し、写真撮影。

3月20日 平面実測。SX01が掘り足りないことが判明し、調査を行う。室町時代の瓦が多量に出土。Bトレン

チ第3層上面で検出された遺構の調査が終了したので掘り下げる。

3月25日 平面実測。SK10・46の実測継続。Aトレンチ北西部の第4層除去。Bトレンチの遺構検出。

3月26日 SX01の瓦の出土状況を写真撮影。

3月27日 SK20及びBトレンチSK61・63の調査。SX01の発掘継続。

3月29日 SX01の底部を確認。SK20の調査終了。

3月31日 鎌倉時代以前の遺構の有無を確認するため、Aトレンチ北西部を掘り下げる。SD11を検出。

4月2日 SD11・12の調査。SD11は平安時代の遺物を出土したが、SD12は無遺物の礫層が埋土である。

4月3日 SD11・12肩口の土層の年代と、下層の遺物の有無を確認するため、本日より断ち割りを開始。SD09・13を断面に検出したので、拡張してSD09・13の方向を調査する。

4月5日 SD09・13の調査。周辺の平板測量。出土遺物を研究所へ運搬する。

4月6日 機材の搬出。

4月7日～8日 SD09・13の断面土層の実測図を完了し、調査を終了。

3 遺跡の沿革

(1) 臨川寺の沿革

臨川寺の地は、もとは亀山殿の別宮 川端殿^{註1}があった地で、亀山天皇の離宮であったが、天皇の女昭慶門院喜子がこれを伝領して住した。門院はのちに、後醍醐天皇第二皇子である世良親王^{ときなが}を養子とし、ここを譲った。親王は元翁本元^{げんのうほんげん}（仏徳禅師）に師事し、禅宗に帰依しており、川端殿を禅刹に改めようと企てたが、これを果たせないまま、元徳2年（1330）に18歳で薨去した。東宮傳として世良親王の養育にあっていた北畠親房は、親王の遺命を果たそうとしたが、元弘2年（1332）元翁本元が入寂したために、造営は再度中断した。

元弘の乱に失敗し、隠岐へ流されていた後醍醐天皇が、元弘3年（1333）鎌倉幕府の滅亡後に京都へ帰還すると、世良親王の遺志をついで、足利尊氏に命じ、夢窓疎石（夢窓国師）を鎌倉から招き臨川寺の開山となし、多くの寺領を寄進^{註3}して国師に管領させた。

夢想国師は寺の北部に開山塔として三會院^{さんねいん}を創始し、同院の東方に自ら庭園を造ったほか、篩月軒、友雲庵なども造営^{註4}した。観応2年（1351）に国師が三會院で入寂して後、寺辺敷地内にはいくつかの塔頭^{註5}が営まれるようになる。

臨川寺は、記録に残るだけで康安元年（1361）^{註6}、永和4年（1378）^{註7}、応仁2年（1468）^{註8}と3度炎上したことが知られている。当初は『臨川寺領大井郷絵図』^{註9}（巻頭図版2）にみるように、下嵯峨の大部分が臨川寺領であり、各地に寺領が多くあったにもかかわらず、度重なる火災や経済的困窮のために、応仁・文明の大乱以降は衰退していったようである。

室町時代末～江戸時代初頭の間に描かれた『洛中洛外図屏風』^{註10}のうちには、臨川寺を描くものも多く、山門、仏殿、法堂、方丈といった中心部の伽藍もみえるため、当時は再建されていたことがわかる。現在残る三會院客殿は当時の遺構とされている。江戸時代後半には臨川寺中心部の伽藍は失われていたようで、『拾遺都名所図会』^{註11}に当時の三會院周辺の様子をうかがうことができる。夢想国師の手になる庭園は、この時期にも名所であり昔日の面影をとどめているが、かつての伽藍、塔頭や寺辺敷地はすでに雑木林、あるいは竹林と化しており、寺もいつの頃からか天龍寺の塔頭となり、わずかに現在まで命脈を保つのみである。

(2) 遺跡の地理・歴史的環境

嵯峨野の地は、亀岡盆地から愛宕山地を縫うように流れる保津川が、京都盆地に流れこみ桂川となって大きくカーブを描きながら南へ方向を転じる北側に位置する。北嵯峨から下嵯峨にかけては、南東方向にゆるやかな傾斜をもつ洪積台地であり、南嵯峨は桂川の土砂によって形成された扇状地である。

嵯峨野北部の山中には、旧石器時代の人間の足跡がすでに印されており、弥生時代の銅鐸の発見例も知られているが、当地が生活の場として本格的に開発されるのはもう少し後のことである。

台地の低平な部分には5世紀後半と思われる段ノ山古墳、清水山古墳から、6世紀末の蛇塚古墳に至るまで、大規模な前方後円墳が継続的に築造されており、当地が強大な政治勢力の本拠地であったことを物語っている。また、記録や伝承によれば、当地の開発は、葛野大堰を造り、新しい技術を導入した秦氏によっておしすすめられたことが知られ、広隆寺をはじめ、数多くの遺跡が当地と秦氏の深いかかわりを示している。

『嵯峨庄田図』は、平安時代前期の嵯峨野の土地利用状況を示している。当地にも条里制が施行されており、台地部には野として残る部分も多いが、低平な部分はかなり広く開発され、田畠となっていたことを知ることができる。また、北嵯峨一帯は、桓武天皇の頃から、皇室・貴族の遊獵の地となり、多くの別業・山荘が営まれるようになる。嵯峨天皇の造営した嵯峨院もその代表的な例である。

これらの別業・山荘内あるいは隣接地には寺院の建立されることも多く、観空寺が嵯峨太上天皇によって、檀林寺が檀林皇太后（橘嘉智子）によって建立されたほか、源融の没後その別業、棲霞観が棲霞寺とされ、嵯峨太上天皇が没すると、淳和太后が嵯峨院の破壊を惜しんで大覚寺とするなど、北嵯峨には皇室・貴族の寺院が次々と建立される。一方、南嵯峨あるいは下嵯峨は、平安京造営時から、保津川を下ってきた丹波産木材を陸揚げし、車載して京内へ運搬する地点でもあったと推定される。

鎌倉時代には桂川の北岸亀山の東に、後嵯峨天皇が、広大な敷地をもつ亀山殿を造営し、南側には別宮として芹川殿、川端殿、萱殿を設けた。こうして下嵯峨は離宮造営によって桂川畔まで開発されていった。

元弘3年(1333)、川端殿の地に、後醍醐天皇が夢想国師を開山として臨川寺を建立したのを皮切りに、室町時代にはいと下嵯峨には次々と禅宗寺院が建立されるようになる。

暦応2年(1339)に後醍醐天皇が崩御すると、夢想国師は天皇の菩提を弔い、冥福を祈る禅刹を建てるよう尊氏に進言し、亀山殿の地に暦応資聖禅寺、後の天龍資聖禅寺が建立される。^{註25} 広大な寺域には、大伽藍と150にのぼる塔頭子院が営まれたという。さらに康暦2年(1380)には、足利義満が春屋妙葩(普明国師)^{しゅうおくみょうは}を開山として、臨川寺の東方に覚雄山大福田宝幢寺を建立した。^{註26} 義満が室町第の東に相国承天禅寺の大伽藍を造営する2年前のことである。こうして下嵯峨一帯には禅宗寺院が薨を競うように建ち並び、五山叢林の隆盛を物語るようになる。

これら五山派寺院の最大の経済基盤である、幕府や皇室から寄進された荘園は、幕府の権威を背景にして、守護たちの侵略から免れていた。荘園経営で得た富と、土倉・酒屋から得た役銭は寺院経済を潤していた。しかし、嘉吉の変(1441)でいったん幕府の権威が失墜すると、守護や土豪が五山派の寺領荘園を侵略しはじめ、多くの禅宗寺院の経済基盤を奪っていった。これに追い討ちをかけたのが応仁、文明の大乱で、京都の禅宗寺院は大部分が戦渦にまきこまれ、経済基盤を失った寺院は衰退の一途をたどってゆく。

嵯峨野の禅宗寺院も例外ではなく、宝幢寺は廃絶し、現在は開山塔の鹿王院が残るのみである。天龍寺・臨川寺は、室町時代末から江戸時代初頭のころは、いくぶん寺観が整っていたようであるが、^{註27} その後の火災、^{註28} その他によって衰え、現在は昔日の面影をしのぶべくもない。

一方下嵯峨は、平安時代から鎌倉・室町・安土桃山時代を通じて木材の集散地であり、江戸時代には角倉了以の保津峡改修、幕末には西高瀬川の開鑿によって、京内への資材輸送の拠点として重要な土地となり、近代に至るまで木材・薪炭の集散地としての性格を備えていた。

4 既往の発掘調査

京都市は昭和44年(1969)11・12月に、京都大学教授岡崎文彬氏を主任として、市道を新設する範囲を調査した。^{註29} この道路は幅約14m、延長約280mで臨川寺旧境内を南北に縦断するものであり、臨川寺の北端を確認できる可能性があった。発掘調査は橋脚建設の部分をつくむ約400㎡について実施され、庭園跡と13世紀から18世紀にかけての遺物が検出された。

昭和49年(1974)には、上記の調査地点の南西、現在の臨川寺三会院の東側で、嵐山美術館の建設に際して224㎡が発掘調査され、^{註30} 溝とピットが検出された。

昭和 50 年 (1975) の調査は渡月橋北詰の東側で、嵐山食堂改築工事の際に実施した。石組みの溝が 4 本検出され、臨川寺に関連のあるものと推定されている。^{註31}

昭和 51 年 (1976) には臨川寺三會院の北、京福電鉄嵐山線の南側で、200 m²が発掘調査された。^{註32}この調査では、建物が 1 棟焼け落ちた状態で検出された。遺物も陶磁器類、瓦器など、室町時代のものが多数検出されている。

以上 4 回の臨川寺に関連する調査で、建物、庭園が確認されたが、寺の範囲はまだ確認されていない。今回の調査区はこれまでに比べ、最も北東に位置しているため、臨川寺の東限あるいは北限を確認し得る可能性があった。

註

- 1 『往古諸郷館地之絵図』（天龍寺蔵）巻頭図版 1
- 2 太宰権帥世良親王御遺命云

西郊川端別業改成禪院 寄附所領等 令止往僧徒 可為閑居道行地之由發願 去五月此 本元上人參彼所之次 令約諾畢 比病痾已無憑 於今者力不及事也 且以比趣可申入禁裏 日来所存被聞食者定無參差之儀与 兼又母儀一期之間 件領等内一所可計進也 又兩所姫宮共在襁褓中 成長之時者必可奉入釈門 是又日来所案也 此外事隨宜可令計沙汰者、元徳二年九月十七日 大納言源 判 此条々去十三日夜被仰置之偏期御平源不能記置 不 大漸之間 為後日所染筆也 且今朝右大弁季房朝臣 勅使被尋御遺跡事 大概以此趣申禁裏畢

『天龍寺文書一』

- 3 『臨川寺文書』『諸寺文書纂三』に、臨川寺創建時の寺領寄進、その他の記録がある。
- 4 『臨川家訓』

此外伽藍郭内及菜園裏 莫卓私庵 予於三會院東構假山水 恐其犯用常住菜園 乃置隣地以代之

『空華日用工夫略集』

臨川寺方丈東軒先 正覚国師嘗手植竹者數十窠 其影篩金最宜月夕 故自榜曰篩月 其他『仏徳大通禪師愚和尚年譜』建武四年丁丑の条に友雲庵の記事がある。

- 5 『応永鈞命図』参照
- 6 『宝幢開山知覚普明国師行業実録』

康安元年辛丑冬十月。臨川寺為丙丁所崇。於是同門耆宿咸謂。非師領寺務。難得興復。便自公府起師干雲居。師素不要出世。以故固辞再四。而不充。鈞帖荐至。竟不可道。

十一月遂領住持事。十八日仏殿山門立柱。廿六日上梁。又方丈畢功。三十日入寺。未周歳殿堂楼観凡所宜有者悉備。

7 『花宮三代記』 永和四年十一月卅日。夜半臨川寺廻祿

8 『続史愚抄』 後土御門 応仁二年九月七日甲子

天龍寺臨川寺等火

この後、『宣胤卿記』 文明十二年九月七日甲申の条には、

晴 昨日人数令同道帰京 嵯峨乱後始而一見 諸寺諸院以下悉以焼失 荒野也 天龍寺臨川寺等如形取立者也 釈迦堂 法輪寺虚空蔵堂 此両所者所残也 奇特不可過之とあり、ある程度復興していたことが知られる。

9 裏書には

臨川寺領大井郷界畊絵図

当寺管領之分与天龍寺及他人管領地相雜 故恐有諍論而難決 仍以絵図所定置也 貞和三年仲冬

開山夢窓 花押

とある。

10 町田家本〔大永5年(1525)～天文4年(1535)頃成立では、山門と仏殿があり、東京国立博物館模本でも同様の伽藍がみえる。山門は3間×2間の二重の楼門で、二階に花頭窓をもつ点に『京洛月次風俗扇流図』に描かれたものとも共通する。上杉家本〔天正2年(1574)頃成立〕では山門、仏殿、法堂、方丈など中心伽藍が一直線上に並ぶ。慶長末年(1614)～元和年間(1615～1624)に成立したとされる山岡家本、勝興寺本には、臨川寺と断定できないが、冠木門と仏殿が描かれている。同じ頃に成立したとされる岡山美術館本の伽藍配置は、上杉家本にみられたものとはかなり異なる。また、寛永年間(1624～1643)成立とされる南蛮美術館本や林家本などにおいても中心部の伽藍は整っている。このように、各々の屏風絵が、当寺の景観を正確に描写するとは限らない点、様式の違いによって描写方法の異なる点を考慮しても、ここに描かれた臨川寺の伽藍に変遷のあったことを知ることができる。しかし、基本的には中心伽藍は室町時代末期から江戸時代初頭にかけて、ほぼ整っていたとみることができよう。

11 天明7年(1787)刊。

12 菖蒲谷遺跡(右京区菖蒲谷)

13 右京区梅ヶ畑の山中で、昭和38年(1963)に4個の銅鐸が発見されたが、近辺に弥

生時代の遺跡は知られていない。

- 14 天塚古墳・仲野親王陵古墳が6世紀前半に、馬塚古墳が同じく後半に比定される。
- 15 『政事要略』交代雑事（溝池堰堤）
秦氏本系帳云。造葛野大堰。於天下誰有比擬。是秦氏率催種類所造構之。昔秦昭王。塞堰
洪河通溝澮。開田萬頃。秦富數倍。所謂鄭白之沃衣食之源者也。今大井堰様。則習彼所造。
- 16 『山城国葛野郡班田図』
- 17 『日本後紀』嵯峨天皇弘仁5年(814)閏7月辛丑の条に
遊獵北野 日晚御嵯峨院 賜侍臣衣被。とあるのが嵯峨院の初見とされ、『続日本後紀』
承和元年(834)8月辛巳には、
太上天皇及太皇太后將遷御嵯峨新院 故有比讎設也とあつて、淳和天皇に讓位した嵯
峨太上天皇がここに遷居し、嵯峨院が本格的に整備されたと考えられている。
- 18 院の西に隣接して建立され、貞観12年(870)に定額寺となった(『日本三代実録』)。
- 19 承和年間(834～847)に檀林皇太后の宮んだのがはじまりで、日本発の禅学講演の
地であったが(『続日本後紀』『文徳実録』)、一条天皇のころはすでに廃亡しており、
赤染衛門の歌に廢墟として詠われている。
- 20 棲霞寺の境内に、東大寺の僧奄然が寛和2年(986)に宋から釈迦如来立像を請来
し(『扶桑略記』)、建立した釈迦堂を起りとする清涼寺が(『小右記』)、のちに融通
念仏の拠点として民間の信仰をあつめたのに対し、棲霞寺は次第に衰え、現在は清涼
寺境内の一堂宇に数体の仏像を残すにすぎない。
- 21 『日本三代実録』貞観18年(876)2月25日癸酉の条に
淳和天皇太后、請以嵯峨院為大覺寺曰。嵯峨院者。太上天皇昔日閑放之地也。升霞之
後。涉日既深。階庭不披。台榭亦壞。仍比年頗加修葺。僅避風雨。尋想宿昔之余哀。
欲守終焉於此地。而今尊像禪經。時備敬礼。鍾磬香花。隨以安置。伽藍之體。仏地之
端。五六年来。適然具足。若不変名定額以示往来。殊恐樵夫牧童或致誤犯。願也樓閣
仍旧。便為道場。名号惟新。称曰大覺。欲使追慕攀啼之志今古无移。眞如法性之因自
他共利。勅曰。宜隨太后御願。賜額曰大覺寺。頒行天下。
- 22 『延喜式』木工寮車載
凡丹波国瀧額津雜材直并桴功錢者。五六寸歩板。一丈四尺柱直各卅七文。簀子一丈二
尺柱直各廿二文。搏一材桴功一文半。凡山城国大井津雜材木直并車賃錢者。五六寸歩
板。一丈四尺柱直各卅五文 搏一材值九文。簀子一丈二尺柱直各廿六文。自同津至寮

車一兩賃五十文

- 23 『皇代曆』建長7年(1255)、『増鏡』をりみる雲の巻、『古今著聞集』巻第八
- 24 『往古諸郷館地之絵図』前出
- 25 春屋妙葩『天龍寺造営記録』他
- 26 『花営三代記』
康暦二年二月廿一日、宝幢寺立柱始(以下略)
宝幢寺造営に関しては『覚雄山大福田宝幢寺鹿王院記』『鹿王院文書二』のうちに記録がある。
- 27 『臨川寺領大井郷絵図』(巻頭図版2)参照
- 28 天龍寺はその後、文化12年(1815)、天治1年(1864)の2度の火災にあっている。
- 29 牛川喜幸「臨川寺庭園の調査」(『奈良国立文化財研究所年報1970』昭和45年 奈良国立文化財研究所)
- 30 臨川寺庭園遺跡発掘調査団『臨川寺庭園遺跡発掘調査概要』昭和50年
- 31 江谷 寛「臨川寺旧境内」(『仏教芸術115号』昭和52年)
- 32 注31に同じ

[参考文献]

- 京都市編『京都の歴史』1～10巻 昭和43年 学芸書林
(財)京都府文化財保護基金『京都の社寺文化』昭和46年
京都大学考古学研究会『嵯峨野の古墳時代』昭和46年
西岡虎之助編『日本荘園絵図集成 上』昭和51年
村田通信『山城名勝志』寛永2年刊(京都叢書 第十三 昭和43年)
秋里籬島『都名所図会』安永9年刊『拾遺都名所図会』天明7年刊
(京都叢書 第六・七 昭和42年)
京都国立博物館編『洛中洛外図』昭和41年 京都国立博物館
辻 惟雄『洛中洛外図(日本の美術121)』昭和51年 至文堂
難波田徹『古絵図(日本の美術72)』昭和47年 至文堂

第2章 遺 跡

1 遺跡の層序

発掘前の地表は、Aトレンチ南部で南に傾斜し、Bトレンチが約1m低くなっている。基本層序は、Aトレンチでは第1層表土（腐植土）、第2層暗褐色土、第3層黄褐色砂泥、第4層黄灰色泥土、第5層暗黄褐色泥土、地山面は黄褐色泥土で部分的に砂礫層が露出している。Bトレンチでは第4層・第5層は認められないが、他はAトレンチと同様である。

第1層は、江戸時代後半以降の遺物を包含する土層である。

第2層は、Aトレンチ西部から南部、Bトレンチに厚く堆積する軟質の土層で、室町時代～江戸時代の遺物を包含する。

第3層は、室町時代の土師器・瓦甎類が多く出土した。その大部分は第4層上面を切りこむ土壌の遺物と同一で、かつ土壌周辺に多く検出されるため、第3層形成時に、第4層上面が部分的に削平され、土壌中の遺物が混入したものと思われる。この土層上面では、安土桃山時代～江戸時代前半の土壌群が検出されたが、第3層中から出土した遺物にはこの時期のものではなく、永正6年（1509）銘の硯が第3層形成の下限に近い時期のものかと思われる。

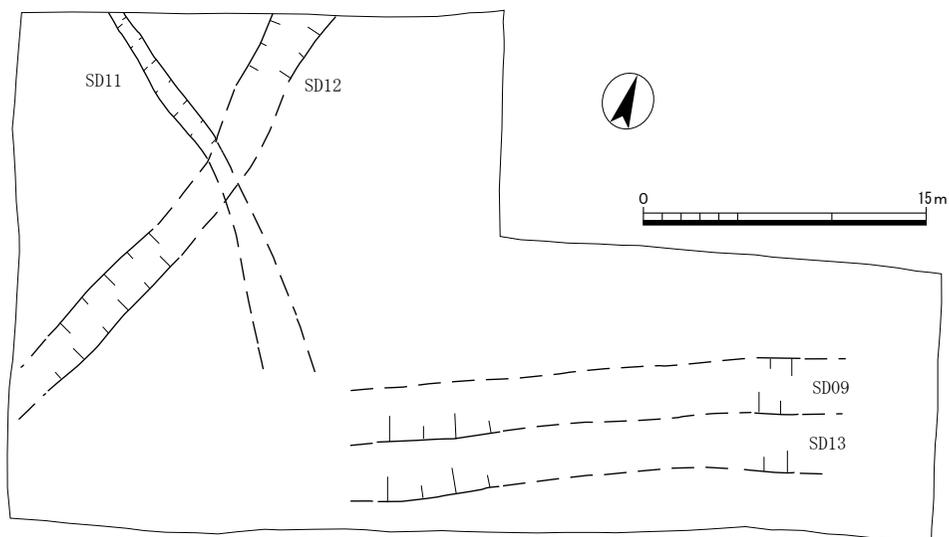
第4層は、鎌倉時代～室町時代初期頃の遺物をわずかに出土し、この上面より室町時代の土器類、瓦甎類を出土する遺構を検出している。第5層も、第4層と同じくBトレンチでは認められず、部分的に堆積した土層である。平安時代の溝の埋没した時に形成された層であるが、遺物は検出されなかった。

地山面では、平安時代の溝を4本検出した。地山は、Aトレンチ中央北部が最も高く、南へ下るにしたがって低くなる。この地山面の高低差は、最も大きい所で約3mに達する。

以上の各土層は、包含する遺物と遺構の関係から、数度の削平・盛土によって形成された整地層と思われる。整地された後の遺構面ごとに、土地利用の変化があったと推定される。整地層の性格については、遺構との関連で検討する。

2 遺構

平安時代以降の各時代にわたる遺構を検出した。土壙 81、溝 15、柱穴 11、その他が 2 箇所である。これらは A トレンチ西部と B トレンチ付近に集中して検出された。遺構は土層との関係で、(1) 地山上面から検出されたもの（平安時代～鎌倉時代の溝）、(2) 第 4 層上面から検出されたもの（室町時代の土壙など）、(3) 第 3 層上面から検出されたもの（安土桃山時代～江戸時代前半の土壙など）、(4) 第 2 層上面から検出されたもの（江戸時代後半以降の土壙など）に分かれる。以下、各時期別に主なものの説明を行う。



挿図3 平安時代～鎌倉時代の遺構



挿図4 SD09・SD13 断面（南半・北半）

(1) 平安時代～鎌倉時代の遺構（挿図3）

SD09・SD13 両溝は、E-E' 断面（第3図）及びこの西方に設定されたトレンチ内で検出した東西方向の溝である。SD09は幅約2.6m、深さ約1.0m。SD13は、流れが2時期に分かれ、上層のSD13Bは幅約3.2m、深さ約0.7m、下層のSD13Aは幅約4.0m、深さ約1.2mである。遺物は、平安時代初期の土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・瓦などが出土した。SD13はA・B二時期の流れに運搬された土砂の堆積で、埋没した後、SD09が形成され、やがて自然に埋没したと思われる。SD13A・B、SD09は、層位的には前後関係が明らかであるが、遺物に時期差は認められない。E-E' 断面では、これらの溝の下層に、幅約9.0m、深さ1.2m以上の河川状の堆積層がみられ、無遺物の砂礫層と泥土層が20～50cmの厚さで互層をなしている。SD13A・B、SD09は、この自然流路の名残りであった可能性が強い。

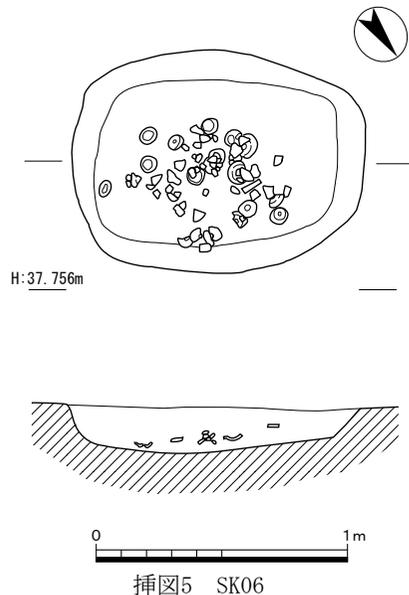
SD11・SD12 SD11（図版6）は、Aトレンチ北西から南東へ延びる溝である。幅約1.0m、深さ約0.2m。埋土は暗灰色粗砂と磨滅した土器片を包含する。また、瓦器片が認められることから鎌倉時代まで下る可能性がある。SD11は幅約2.0m、深さ約1.0mで、埋土は礫層が1層だけである。SD11と規模は異なり、交差するように南西方向に流れる。この両溝の新旧関係は確認できなかったが、いずれも地山を切りこむ溝である。

(2) 室町時代の遺構

SK04 長径0.75m以上、短径0.48m以上、深さ0.16mの土壙である。掘形はトレンチ壁にかかり、SK05に切られているため不明である。埋土は茶褐色土で、遺物は土師器が出土した。

SK05 掘形はトレンチ壁にかかっているが、南北1.5m以上、東西0.35m、深さ0.25m、壁が垂直に近い溝状を呈すると思われる。埋土は、暗褐色土で焼土・炭が混入している。遺物は、土師器・磁器・瓦器・鉄釘が出土した。

SK06 SK05に切られる楕円形の掘形の土壙である。長径1.15m、短径0.88m、深さ0.17mで底部が浅い皿状を呈する。埋土は、暗褐色砂泥に



焼土・炭が混入し、硬くしまった土層である。遺物は土師器皿が検出された。出土状況は、土壇底部に密着するものも認められ、挿図5にみられるように廃棄されたような状態である。

SK19(図版7) 掘形の推定規模は、南北5.7m、東西3.0m、深さ0.4mの不整形な土壇である。埋土は、暗褐色砂泥に焼土・炭が混入する土層である。遺物は、土師器・陶器・緑釉陶器・瓦器・鉄釘と多くの完形の土師器皿が、土砂とともに北側から捨てられたような状態で出土した。規模は異なるがSK06に類似する廃棄壇と思われる。

SK20(図版6) 掘形は隅丸の長方形である。推定規模は東西9.0m、南北1.2m、深さ0.45mの溝状を呈する。また西側はSK02に切られ、東方部はSK08・17・18・19に切られている。埋土は暗褐色砂泥である。遺物は土師器・陶器が出土した。性格については不明である。

SK46(図版7、第4図) 掘形は不整形を呈し、南北3.1m、東西2.2m、深さ0.75mの底部の平坦な土壇である。埋土は、上層では軟質の焼土・炭を多く含む暗褐色土で、遺物のほとんどはこの層から出土した。下層も焼土・炭を含み、比較的しまった黄褐色泥土である。出土遺物は、土師器・陶器・磁器・瓦器は少量であったが、小形の軒瓦が54個体以上、71個体の完形品を含む敷瓦が遺物箱に72箱、鬼瓦が2個体分など、瓦類が多量に出土した。出土状況は廃土とともに投棄されたような堆積をしている。

SK45(図版7) SK46と規模に多少の違いはあるが、遺物の出土状況が類似しており、同様に廃棄壇であったと思われる。SK46出土の鬼瓦と、同一個体の破片が出土している。

SK46・45土壇上に堆積した第3層中には、土壇と同様の遺物が多量に混入し、附近にも散乱しているため、第4層上面が部分的に削平された後に第3層が堆積し、遺物が混入したとも考え得る。

SK61(第5図) 掘形は不整形で、東西2.1m、南北1.57m、深さ0.16mである。底部に約20cm大の川原石が数個検出された。埋土は、上層に焼土・炭を多く含む黒褐色土、下層に暗褐色砂泥が堆積する。遺物は、土師器・陶器・瓦器・瓦類・小金具や鉄釘が出土した。

SK63(第5図、図版7) 掘形は長方形で南北1.0m、東西0.7m、深さ0.2mである。土壇の壁にそって、約20cm大の川原石が置かれ、内部には径約35cmの3個の川原石が南北に並べられている。遺物は検出されず、遺構の性格は不明である。

SK64(図版7、第5図) 掘形が方形を呈する南北2.35m、東西2.27m、深さ0.15mの土壇である。中央に、東西1.9m、南北0.97mの長楕円形の凹みがあり、瓦類破片と径10～12cm大の川原石が集中して検出された。金具や鉄釘がこの附近から出土した。他に土

師器・瓦器・磁器などがある。

SD08(図版6) 幅約0.8m、深さ0.1～0.5m、長さ11.6mの東西方向の溝状遺構である。埋土は暗褐色砂泥である。出土遺物には土師器・瓦器・瓦などがあるが、遺構の性格は不明である。

SX01(図版5、第3図) Aトレンチ西端に位置する遺構である。南北21.0m以上、東西2.0m以上、深さ1.8mで、掘形は西及び南が調査区外になるため不明である。埋土は第3図のように、下層[10、暗褐色砂泥(礫混)9、暗褐色混礫土]が堆積した後に、上層[8、暗茶褐色土(礫混)7、暗褐色土(礫混)6、茶褐色土(礫混)]が堆積する。堆積の状況は人為的なものである。遺物は土師器・陶器・鉄釘・硯のほか、瓦類が遺物箱に120箱出土し、その2/3は6・8から出土した。7・6と8の底部付近には瓦が密集して検出されており、それらの出土状況が類似することや、相互に接合できるもののあることから、これらの層は同時期の堆積と思われる。9・10では、遺物が散在しており、6～8の出土状況とは異なる。しかし、時期差は認められない。遺構の掘形は、土溝状か溝状か明らかでないが、東西断面では土層がU字状に堆積しているため、トレンチ西壁はこの遺構の西端に近いことを示している。したがってSX01は溝状の遺構であった可能性が強く、検出された掘形の北端で西方へ曲っていると考えられるが、確認できなかった。また、SX01の埋土は、瓦類に比べて土量が圧倒的に多いため、単に廃棄土壌として掘られたとは考え難く、本来は何らかの区画を示す溝状遺構であったのを、使用した可能性が強い。

SX02(第5図) 掘形は、東西1.7m、南北1.2mの楕円形の土壌である。上層は焼土・炭を多く含む黒褐色土で、これを除去すると、西部に約20cm大の川原石で囲まれた焼土層を検出した。焼土の上面は、内部が凹んでおり、おそらく炉であったと思われる。これと関連する遺構は検出されていない。

(3) 安土桃山時代～江戸時代前半の遺構

SK08 長方形の土壌である。南北7.95m、東西1.25m、深さ0.38mで断面が逆台形を呈する。埋土はしまりのない暗褐色土である。遺物は土師器・陶器・瓦器・瓦類・鉄釘が出土した。SK07・09・22を切っており、この面の遺構のうちでも比較的新しい。類似した土壌にSK07がある。

SK09 楕円形の掘形を呈する、長径1.25m、短径1.03m、深さ0.22mの土壌である。埋土は、底部の周辺部に淡黄灰色泥砂(小礫混)が約10cm堆積した後、中央部に暗褐色泥砂(焼土・

炭混)が堆積する。遺物は上層から若干の土師器片が出土した。

SK10 掘形は東西 4.75m、南北 1.37m の長方形で、深さ 0.2m、底部が浅い皿状を呈する。埋土は暗褐色泥砂である。出土遺物の大半が室町時代の瓦甎類であったが、棧瓦・土師器・焼土塊なども検出されたため、遺構自体は近世の廃棄場であろう。

SK52 掘形が楕円形を呈する。長径 2.0m、短径 1.7m、深さ 0.55m の土壌で、底部に約 10cm 大の川原石が部分的に敷かれたような状態で検出された。埋土は、上層に茶褐色泥砂、中層に暗黄褐色砂泥(礫混)、下層に暗褐色泥砂(礫混)が堆積し、いずれも焼土・炭・礫の混入がみられ、人為的に埋められた堆積状況を示す。遺物は瓦・陶器が出土した。SK51 も同様な土壌である。

SD04 長さ 12.8m 以上、幅 1.0m、深さ 0.8m で断面が U 字形を呈する南北方向の溝である。埋土は暗褐色土で、上層に若干の腐植土が認められる。遺物は、土師器・陶器・磁器・瓦甎類が出土した。また、この溝を境にして、東側にのみ土壌が分布し、西側には一基も検出されなかった。

(4) 江戸時代後半以降の遺構

SK10(図版 6、第 4 図) 掘形は長方形を呈し、東西 4.75m、南北 1.37m、深さ 0.2m で断面が浅い皿状をなす。埋土は暗褐色泥砂に焼土塊が混入する。遺物は、土師器・瓦甎類などが出土した。特に室町時代の瓦甎類が多く検出されたが、棧瓦も含まれているため江戸時代後半以降の廃棄場であろう。この土壌から出土した青磁片が、SK46 出土のもの(第 6 図 P24)と接合したことから、第 3 層中に混入していた遺物が混じったものと思われる。

SK34 江戸時代後半以降の遺構のうちでも特異な構造をもつものである。掘形は 1 辺約 2.0m の方形、内方は南北 0.74m、東西 0.86m である。厚さ約 16cm の花崗岩を使用した石組みの墓壇で、昭和 51 年(1976)の改葬の際に攪乱されている。

SK41(図版 7) 楕円形の墓壇で、長径 1.05m、短径 0.92m、深さ約 1.85m を呈する。埋土は暗褐色土で土師器が若干出土した。この墓壇の特徴は、内部に口径 60～64cm、器高 76cm の甕が埋設されていることである。SK44 も同様であるが、改葬されたために甕内から遺物、人骨は検出されなかった。

SD05 比較的規模の大きい溝状遺構で、幅約 3.7m である。A トレンチ南部を屈曲しながら走るが、水の流れた痕跡はない。埋土は暗褐色土で上層に腐植土が堆積する。焼土・炭・棧瓦を多量に出土する部分がある。SD07・10 も同様な遺構であろう。

SD06 A トレンチ中央に位置する南北方向の溝である。幅約 1.0m、深さ 1.2m で、南端は SK47、SD07 に切られる。埋土は暗褐色土で上層に腐植土が認められる。遺物は土師器・棧瓦・鉄釘などである。この溝を境にして西側が高く、SD02～04 との間に土壙が集中しているため、これらの溝は墓域を区画するものと推定される。

遺構面	時期	遺構
地山上面	平安時代～鎌倉時代	SD09・11・12・13A・13B
第4層上面	室町時代	SK01～06・19・20・45・46・61～64・68 SD08・SX01・02
第3層上面	安土桃山時代 ～江戸時代前半	SK07～18・21・22・24～33・35～40・42・48～52 ・54～60・65～67・69～81 SD01～04・14・15, Pit1～11
第2層上面	江戸時代後半以降	SK10・23・34・41・43・44・47・53 SD05～07・10

表1 遺構一覧表

3 小結

今回の調査地は、臨川寺旧境内に位置し、これに関連する遺構の存在を予想した。しかし、SX01・SK46のように多量に瓦甎類を出土し、近辺に建物のあったことを示す遺構は、わずかに数箇所検出されたにすぎず、直接臨川寺に関係する建物遺構はまったく認められなかった。当初は単に臨川寺創建時の遺構検出にのみ主眼をおいていたが、当地の土地利用は予想していたより複雑で、臨川寺創建以前及び以後の、数回にわたる整地層があり、それぞれの面で遺構群を検出した。以下、当調査地における土地利用の変遷を、時代を追ってたどることとする。

平安時代～鎌倉時代には東西方向に流れる溝 (SD09・13)、南北方向に流れる溝 (SD11・12) がある。前者の埋土は、砂礫と泥土が互層をなし、自然流路であったと思われる。そのうえ下層には東西方向の幅 9m の河川状堆積がみられることから、この河川が土砂の堆積によって小規模化し、埋没してゆく過程のものであったと考えてよかろう。出土遺物をみると SD09・13 は平安初期のもの、SD11 は 12 世紀以降のもので占めている。後者は遺構の規模も小さく、性格を異にし、あるいは人為的な溝であった可能性もある。これらの溝が埋没した後に A トレンチ全域に第 5 層及び第 4 層が堆積するが、盛土整地層の可能性が高い。第 4 層からはわずかに鎌倉時代～室町時代初頭の遺物が検出されたのみである。この両層が堆積した後、臨川寺に関連する室町時代の遺構が形成されてゆく。

臨川寺創建の頃に溯り得る遺構は確認されていないが、SX01は当寺の調査区付近の性格を知るうえで重要な遺構である。すなわち、SX01には、臨川寺関係の建物に使用されたとと思われる瓦甎類が多量に投棄されており、また、このような大規模な溝状遺構が寺院の枢要部にあったとは考え難いため、臨川寺の縁辺部にあつて、何らかの区画を示す空堀であったと推定できよう。SK04・05・06・19・20は、出土遺物からSX01埋没前に形成された廃棄墳であると思われ、当時のこの付近の土地利用を知ることができる。SX01が埋没した後にSK45・46に瓦甎類が投棄されSD08が形成される。これらの遺構の切りこむ第4層上面が部分的に削平された後に、第3層が堆積する。室町時代末期のことである。

第3層上面では、Aトレンチ西半と、Bトレンチ付近に土壙群が検出された。Aトレンチ西半の土壙は南北長軸、Bトレンチ付近の土壙は東西長軸のものが多いが、いずれも安土桃山時代～江戸時代前半頃と思われる。なかには墓壙であったと推定されるものもあり、当地が臨川寺の北東にあつて墓域を形成していたと考えることも可能である。SD04はSX01のすぐ東側を平行に走っており、以上の土壙はすべてこの東に位置することから、この溝状遺構も区画を示すものであったと推定される。

第2層が堆積した後、江戸時代後半以降の遺構が形成される。Aトレンチ西半では、前代に引き続いてSD05・06のような溝状遺構とともに土壙墓群が形成されている。雑木林となった当地は、近年まで墓域として利用されており、発掘調査に先立って改葬が行われたのは第1章で述べたとおりである。

第3章 遺物

出土遺物は遺物箱にして270箱余りで、土器類、瓦甎類、金属製品、石製品がある。この中で最も出土量の多いのは瓦甎類で、260箱出土している。

遺物は遺構、遺物包含層から出土している。遺物の共伴関係については、遺物包含層出土のものは、混入が多く複雑なため、遺構出土の明確なもの、数量的にもまとまりのあるものを中心に説明する。また遺物の種類が多く、図版で見分けにくいものがあるので番号の前にローマ字で種類を示した。瓦甎類はT、土師器E、瓦器Z、須恵器・陶器C、磁器P、灰釉陶器A、緑釉陶器Gの記号を付した。

1 土器類

(1) 平安時代～鎌倉時代の土器類

土師器 皿(E01)と鉢(E08)がある。皿は底部内面をナデ、体部は円周に沿ったナデ、口縁は内側へ突出する。鉢は小破片を復原したもので、口径が不安定である。内面はナデ、外面には指頭の痕跡を明瞭に残すが、ナデはない。長岡京左京四条四坊遺跡に類例がある。^{註1}

須恵器 杯、杯蓋、甕がある。杯ではC02とC03の体部の断面が著しく異なる。C02は高台部と体部の境に段を有し、体部は上方へのびるが、C03は体部が内湾しながら外上方へのび、端部はわずかに外反する。C03は釉はまったく施されていないが施釉陶器の形態と共通するものがある。高台は両方とも貼りつけ高台である。蓋(C06)は天井部が平坦で、口縁は強く屈曲する。器高が高いのが特徴である。つまみの部分は欠失している。

施釉陶器 緑釉陶器(G04・05)は軟質で、表面は磨滅し、局部的に釉が残存している。G04は切り高台、G05は蛇ノ目高台である。灰釉陶器(A07)は直径が20cmを超える大形の蓋で、外面にだけ灰釉が施される。胎土は灰白色で混入物は少ない。

平安時代の遺物はこの他にSD13出土の土師器甕の破片と、SD11出土の土師器皿・瓦器碗の破片が検出されているが、いずれも微細な破片であるため図示できなかった。

(2) 室町時代の土器類

土師器 口径12cmを超える皿Aと、10cm以下の皿Bに大別できる。皿A(E15～18)は

形態に2種類ある。底部が丸みを帯び、体部がゆるく内湾し、口縁が外反するもの(E15～17)と、底部の丸みが失われ、器高に対する口径比が少し大きくなるもの(E18)とがある。これらはE18を出土するSK08が、E15～17を出土するSK19・20より切り合い関係で新しく、形態の差異が時間差であることが明らかである。

皿Bは皿Aと類似した形態を有するが、平底(E11・14)と、底部中央を突出させたもの(E09・10・12・13)がある。底部の形以外に大きな差異はなく、底部内面を上方へ突出させるものはヘソ皿とも呼ばれる。容量は砂をつめて測ると50～60ccであった。A・Bとも成形手法は類似し、ナデ調整を行うが、体部外面下半、底部は未調整である。混入物は少量で焼成温度もあまり高くなく、中性～弱い酸化炎で焼成するため、極めて淡い赤褐色を呈する。

瓦器類 鍋、釜、鉢、香炉などの器形が検出されている。鍋(Z66)はやや外上方にひらく体部と、U字型に屈曲する口縁を有する。内面はハケメが残り、外面は未調整、口縁はナデにより仕上げる。釜は形態に2種類あり口縁が少し内傾するもの(Z64)と、内側へ屈曲し、端部が丸く肥厚する口縁を有するもの(Z65)がある。突帯は貼りつけて、それより下方の外面は指頭痕が残るが、内面・突帯部およびその上部はナデ。

鉢は7種類あり、平面形が丸いもの6種(A～F)と方形が1種確認されている。他の遺跡出土の類例から火鉢と類推でき、大形香炉の可能性のあるZ57を含めて、今回は火鉢と仮称する。火鉢は、脚を有する器形である。方形のものは小破片1個だけで図示できないため、円形の火鉢の解説を行う。鉢A: 外方へふくらむ丸味を帯びた、浅い体部を有するもの(Z58～61)。鉢B: 少し扁平な球体に、筒状の頸部のついたもの(Z56)。鉢C: 形態はAもしくはBで、透しを有するもの(Z70)。鉢D: 筒状の体部を有するもの(Z57)。鉢E: Dに類する体部、頸部、発達した口縁部を有するもの(Z55)。鉢F: その他(Z63)がある。

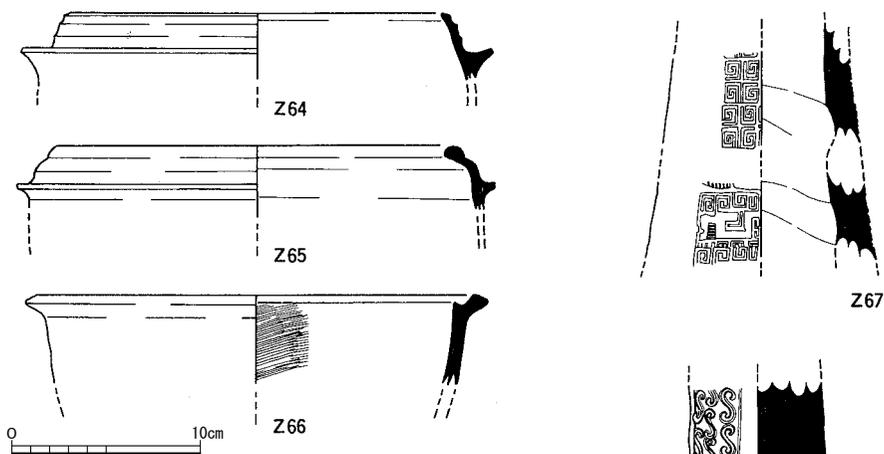
これらの火鉢には、器面に装飾のあるものとないものに分類できる。装飾のあるものには、a: 突帯のあるもの(Z55～60・62)、b: 文様2個一組の刻印を連続して押すもの(Z57・58・59・62)と、小破片で図示していないが単独の刻印を押すものもある。c: ヘラ描きの文様(Z55)、d: ケズリ出しの文様(Z56・57)がある。刻印の文様には宝相華文(Z59・62)、雷文(Z58)、多重の四辺形と×印を組み合わせた文様(Z57)がある。各文様には変種があり、Z59の宝相華文とZ62のそれは非常に良く似ているが、同一ではない。刻印は挿図7に示した。

器表は、外面はヘラミガキで滑らかに仕上げるが、内面・底部は粘土を指でぬぐい取っ

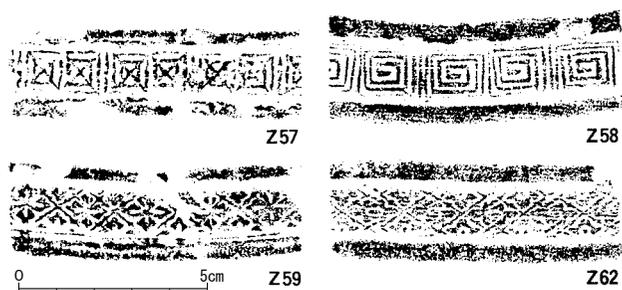
た跡が残る。脚は入念にへらでケズリ出す (Z57) ものがあり、SK19 でもこの破片が出土しているが、成形にまったくへらを使用しない脚 (Z63) もある。いずれも炭素が吸着して黒色であるが、Z55 は火災などの原因により炭素は燃えつきて、赤褐色を呈している。胎土は鍋・釜類より良好で砂をあまり含まない。また Z70 は器表の内外に、本来朱色であったと思われる茶褐色の漆が付着している。

香炉 (Z37) は筒型の体部に唐草文状の文様を刻む。3 個の脚がつくとと思われる。第 2 層から出土したため年代は限定できないが、室町～江戸時代のものとして推定でき、右京区常盤^{註2}仲之町集落跡で検出されたものに類似する。

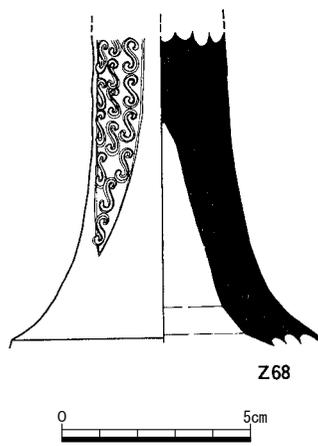
SK46 から Z67 が検出された。Z67 は二つの破片から成り、一つは第 2 層から検出されている。器表には炭素が吸着し、全面に雷文を刻印する。内面は指でナデた痕跡を残す。Z68 は外面を刻線で区画し、S 字状の刻印を押す。内面には粗いナデの痕跡が残る。Z67・68 は形態から類推すると高杯か燭台であるが、高杯とは細部の形、文様のある点が異なり、



挿図 6 瓦器鍋・釜 (1:4)



挿図 7 瓦器鉢文様拓影 (1:2)



挿図 8 燭台 (1:2)

後者である可能性が高い。

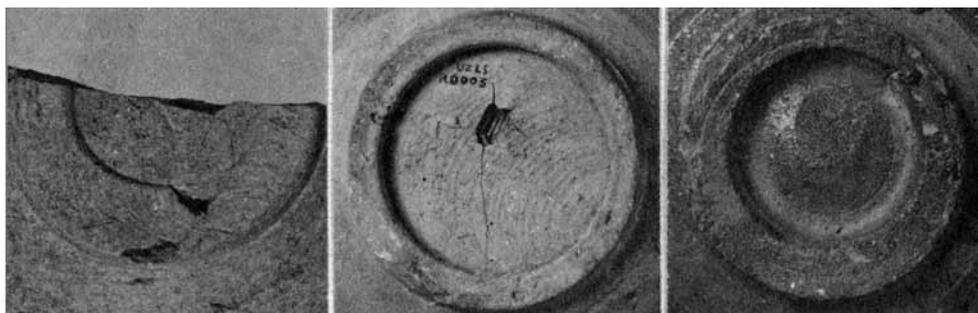
陶器類 陶器には椀、鉢、燭台、花瓶、香炉がある。椀には黒褐色ないし茶褐色の釉を施した天目茶碗 (C20・21) と古瀬戸の灰釉椀 (C40～43) がある。天目茶碗は外反する口縁部に特徴があり、体部下半にはヘラケズリの痕跡が残る。胎土は黄褐色のザラザラした感じのもの (C20) と、灰褐色で小さい黒点のある硬く焼きしまったもの (C21) がある。古瀬戸の灰釉椀は、わずかに内湾しながら上方へのびる体部を有し、体部外面下半はケズリ出しである。高台は、糸切りの後にケズリ出し高台 (C42) にするものと、糸で切り離した後に高台を貼りつけるもの (C43) とがある。挿図 9 に C40・42・43 の高台部を示したが、この写真で C42 の高台下端には糸切りの痕跡が認められ、C43 の高台は底部に糸切り痕が残り、高台を貼りつける際のナデによって一部消されている。

香炉 (C38・39) は体部が筒形で、口縁は内外へ肥厚する。外面には平行の沈線を施す。C38 は底部中央を欠失しているが、周縁はヘラケズリの痕跡が残っている。C39 は糸切りの後周縁をヘラケズリする。脚は貼った後にヘラで削って形を整える。胎土は、C38 は C21 と同様で、C39 は C20 と同様である。

C32 は燭台の脚部で、内面にはロクロで成形した痕跡が明瞭に残る。下端には糸切りの跡が残っている。C35 は花瓶の脚部で底部外面を糸切りの後、外周をヘラケズリし、U 字形の沈線がある。C36 は糸切底の小壺で第 4 層から出土した。

古瀬戸は各器形ともムラの少ない浅緑色の釉が施され、C38 を除いて、胎土は C20 と同様である。

鉢は 5 種類に分類できる。鉢 A (C44～47) は胎土に粗粒の長石を含み、砂が混じる。口縁の端部に特徴があり、上端がゆるく湾曲するか、段になる。焼成は生焼けのもの (C44) もあるが、赤褐色で硬く焼かれている。内面に 5 本を単位とする櫛状の原体で施された筋



C40

C42

C43

挿図 9 陶器高台

がある。鉢B(C51～54)は茶褐色を呈し、良く焼けしまっている。この一群は口縁の形態から3種類に細分できる。C51は口縁部の厚みが体部より増すだけであるが、C52では口縁端部の上端が発達し、下端もわずかに突出する。C53・54は口縁上端の発達が著しい。いずれも内面に筋が施されていたと考えられるが、確認できるのはC51で8本組の筋が10本施される。C51の体部内面の下半は使用により磨滅しているが、体部外面の成形は入念である。C53・54は成形時の段がわずかに残る。鉢C(C50)は少し青味を帯びた灰色で、いわゆる須恵器の色調を呈する。胎土には砂粒を多く含み、焼成は鉢A・Bより悪く、少し焼成の悪い須恵器と同様である。内面は使用により、良く磨滅しているが、筋が施されていた痕跡はまったく認められない。鉢D(C48)は明るい赤褐色を呈し、焼成は鉢Aと類似する。胎土は砂を少し含むが長石などは混じっていない。内面は一本単位の筋を全面に刻む。体部外面には回転を利用したナデではなく、指による調整痕を残すのが特徴である。鉢E(C49)は鉢Dと類似した胎土で、内面の筋の施し方も共通であるが、焼成は不良で土師器に近い焼きあがりである。小破片で表面が磨滅しているため不明瞭であるが、鉢Dと区別して鉢Eとした。

これらの鉢の産地は、各々の特徴から、Aは信楽、Bは備前、Dは丹波と推定できるがC・Eについては不明である。

磁器 中国製、朝鮮製のものが検出されている。P22・23は朝鮮製の象嵌青磁である。P22は全面に青味を帯びた緑灰色の釉が施され、文様は内外に描かれる。体部外面には2重の円を白色土で象嵌し、この円の上下左右に3点を単位とする点を呉須で描く。円の中央には9個の点を花状に配する。内面には2重の圏線で4区に分割する。これを底部から口縁にむかって1～4区とすると、1区は欠失して不明、2区は菊花文の文様帯、3区は雲と鶴の文様帯である。鶴は頭・尾・脚を呉須で描き、これが対称の位置に4個配されていたと考えられる。4区は無文である。高台は細く、下端は釉が施されていない。P23は外面に円を象嵌し、3点を単位とする点を上下左右に呉須で描く。内面は底部中央に菊花文、底部と体部の境に一条の線を配し、体部に鶴と雲の文様帯がある。

中国製の磁器はP24・25・26・28・29・30である。P25・29は白磁で、前者の高台はケズリ出しでこの部分には釉が施されず、体部の施釉法はいわゆる浸しがけである。P24・28は青磁で、淡い青緑色の釉が施される。P24は外面に片切彫による花文を施す。P26・30は染付で、呉須で直線と花文を描き、高台はケズリ出しで、蛇ノ目高台である。P30は直線と花文を内面に、外面には直線と木葉状の文様を描いている。これは胎土が淡黄灰色

を呈する。

(3) 江戸時代以降の土器類

土師器の皿 E19 は、内面の底部と体部の境に成形時の凹線が明瞭に残る。黄瀬戸 (C33・34) は皿であり、C34 は内面に菊花文を施す。C40 には浅緑灰色の釉が施されているが、高台のケズリ方 (挿図 9) は唐津風である。前の項で扱った陶器 (C48・52・53・54) はこの時期に含められるべきものである。また Z37 もこの時期に含まれる可能性がある。磁器 P27 は伊万里焼で外面に椿を呉須で描く。江戸時代後半以降の土壌群の中で甕棺として使用されたものがあり、調査前の改葬の際に掘り残されていた甕 (挿図 10) がある。これは最大径 64cm で、高さ 76cm で、鉄釉が刷毛で塗られている。

P31 は呉須で直線と草花文を描く。胎土は暗青灰色を呈し、国産の磁器とは異なる。草花の文様は、中国の官窯で製作されたものの様な端正さはない。白色の釉が施され、高台の周辺に砂粒が熔着している。

(4) 小結

今回検出された土器類は全体として多種多様であるが、豊富な遺物を含む良好な一括資料となるべきものがなく、器種構成のあり方を知ることができなかった。しかし、比較的攪乱の少なかった第 4 層は、大まかな傾向をつかむ手がかりになる。第 4 層出土の土師器皿は 1,000 片を少し超える。他には瓦器火鉢 47 個体^{註3}、陶器鉢 24 個体、陶器碗 (古瀬戸) 5 個体、香炉 (古瀬戸) 4 個体、花瓶 (古瀬戸) 2 個体、燭台 (瓦器・古瀬戸) 2 個体 (Z68・C32 と同形)、天目茶碗 (国産品) 2 個体、磁器碗類 8 個体 (白磁 1 個体)、大形の甕 3 個体 (備前系 2・常滑系 1) がある。陶器の鉢類は六古窯系以外に須恵器系の鉢が 6 個体ある。この種の鉢は市内各地の中世遺跡^{註4}で検出され、問題になっている。中世陶器の研究は六古窯系が中心であるが、これら以外の製品を窯業生産の系譜の中でどのように位置付けるかは今後の課題である。

臨川寺のこれまでの調査については前章であげたが、昭和 51 年 (1976) の調査地^{註5}は今回の西方に位置し、多量の中国製陶磁器が出土している。これに比べると今回の調査で検出された遺物は質量ともに大きな差異が認められる。このように同一の遺跡の範囲内でも、遺物のあり方に相違があり、このことは後世にこの地が墓地化することと無関係ではないであろう。

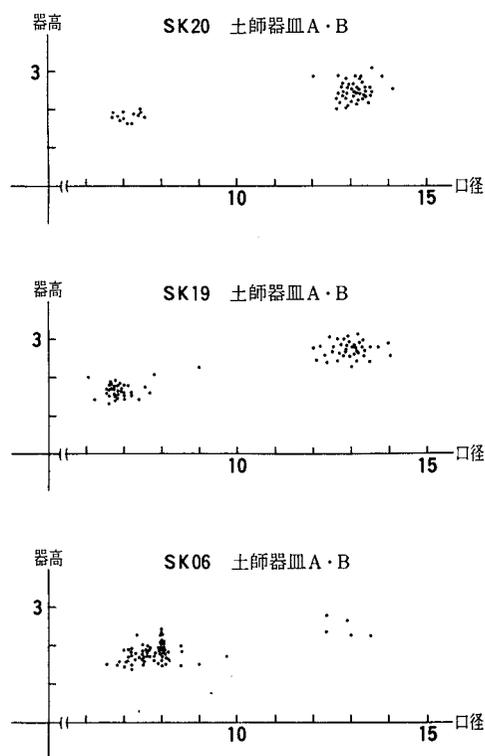
各遺構出土の遺物の器種構成をみると、SK06では土師器皿103個体（皿A7・皿B96）、瓦器（Z56）1個体である。SK19では土師器皿420個体（皿A111・皿B309）、瓦器3個体（Z58）ほかが出土している。SK20では土師皿181個体（皿A61・皿B120）、瓦器鉢1個体（Z62）、陶器鉢1個体（C51）が出土している。いずれの遺構も土師器皿が多く、挿図11にみるように、皿A・Bは口径10cmを境に明確に分かれる。SK06では皿Bの比率が高いのが注目される。皿Bには平底と底に突出させるものがあるが、平底はSK06で3個体、SK19で1個体である。各遺構の土器の形式には大きな差異はなく、年代の接近した遺構と考えられる。

瓦器の鉢類は形態から類推すると火鉢が最も似ているが、器形の小さいZ57などは香炉の可能性もある。文様、形態、製作手法が画一的で、文様・形態の各部の組み合わせを変えて変化をもたせている。このような規格性を維持するには、組織された生産体制が必要である。製作者達の組織化、専門化は生産性を高めるために大きな効果があったと推定されるが、これらの実態がどのようなものであったかは今後の研究課題である。

古瀬戸のほぼ同形態の椀が、同一の遺構から出土している。一方は糸切り・ケズリ出し高台（C42）、他方が糸切り・貼りつけ高台（C43）である。これをどう考えるかについては、この資料だけでは不明なことが多いので、ここでは事実を指摘するにとどめる。



挿図10 SK41出土甕



挿図11 土師器の法量（単位cm）

外国製磁器類では朝鮮製^{註6} (P22・23) の磁器があり、14世紀頃の製品と考えられている。また中国製の磁器ではP24・28が竜泉窯系の青磁である。P30・31については中国南部～安南製と考えられるもので16～17世紀頃のものである。

国産陶器類の年代については不明な点が多いが、E18は山科本願寺跡^{註8}で出土する形式と同形式であり16世紀代のもと考えられる。従って、この土器を出土する土壌(SK08)に切られる。SK19・20出土の土器(E09・13～17)は確実に16世紀代を年代の一点とする土器形式より古い形式と考えられる。またSK19・20の土器群は14世紀代の土器形式^{註9}とも異なり、現状では時代を限定できないが15世紀代の年代を考えることができる。さらに限定するならば、土器の形態からみて、16世紀代のものに近い形式であり、後半代のものであると考えられる。これはSX01の瓦と土器の関係、SX01とSK19・20の土器が同じ形式であること、瓦の年代、文献にてでくる事項などを考え合わせても、この年代を与えることに大きな矛盾はないと思う。

註

- 1 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『長岡京跡発掘調査報告』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告-II 1977年）
- 2 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告III 1978年）
- 3 個体を区別できないものがあるので破片数を数えた。
- 4 『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物』同志社大学校地学術調査委員会 1978年
- 5 江谷 寛「臨川寺旧境内」（『仏教芸術』115号 1977年）
- 6 磁器類は東京国立博物館の長谷部楽爾氏に御教示いただいた。
- 7 『竜泉青磁』（1966年 文物出版社刊）この本にP24と同形品が紹介されている。
- 8 昭和47年(1972)、六勝寺研究会調査。未報告。
- 9 昭和53年(1978)、京都市埋蔵文化財研究所が烏丸六角で調査した遺跡の一括遺物に年代を限定できるものがある。未報告。

2 瓦甄類

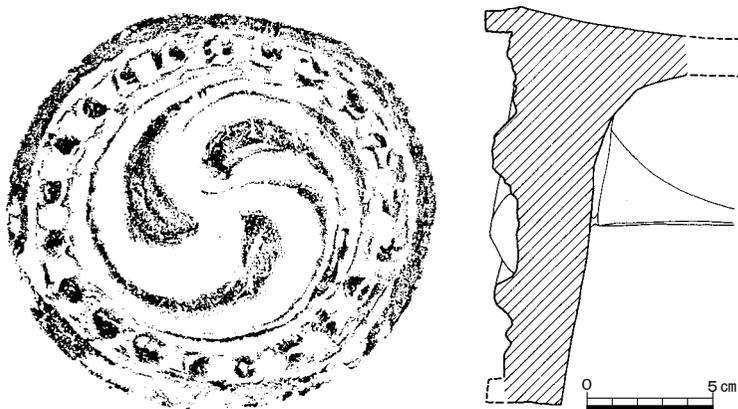
瓦甄類は、調査区全体で遺物箱に約 260 箱出土し、大部分が平瓦・丸瓦・敷甄であった。軒瓦は 222 個体、鬼瓦 2 個体、伏間瓦^{註1} 6 箱、熨斗瓦^{註2} 3 箱が出土した。SX01、SK46 出土の瓦甄類は、それぞれ 120 箱、80 箱で合計して全体の約 80% にのぼる。軒瓦、道具瓦に関しては調査区全体から出土したものを対象とするが、資料的にまとまった瓦甄類を出土した遺構は少ないため、丸瓦・平瓦に関しては SX01 出土例、甄に関しては SK46 出土例といった一括資料についてのみ扱った。

(1) 軒瓦（図版 13～18、第 8 図～12 図）

軒丸瓦 出土総数は、瓦当部の残存するものが 121 個体あり、分類不可能な細片を除外すると、瓦当文様から 23 型式に分類することができた。範型によってさらに分類することも可能であるが、同一型式の軒丸瓦の成形・調整手法はすべて共通している。瓦当主文様（以下主文と呼ぶ）には巴文・蓮華文・花文・文字文がある。室町時代のものでは、巴文を主文とする軒丸瓦が 98% 以上を占める。また瓦当の直径は、大型（14cm 以上）、中型（約 12cm）、小型（約 10cm）の 3 種に分かれ、大型が主として軒先に使用されたのに対し、小型は桧皮葺、柿葺などの屋根の大棟に使用された薨丸瓦^{註3}である。中型は隅軒に使用されたものなど、異なった用途が考えられる。これは当調査地出土の臨川寺以前の軒丸瓦についても同様であろう。ここでは薨丸瓦など軒先に使用されないものも、便宜上軒丸瓦の項で扱った。^{註4}

計測値、遺構・層位別出土数は、表 2 において型式別に示した。^{註5}

T01 三巴文軒丸瓦 瓦当下部の破片であるが、同範例（挿図 12）^{註6}より、左巻きこみの^{註7}



挿図 12 常盤仲之町集落跡出土軒丸瓦（1:3）

巴を内区に、21個の珠文を外区に配する瓦当文様である。巴文は範の彫りがかなり深く、外区幅が狭いのと比べ、珠文直径の大きい点が特徴的である。周縁は狭く比較的低い。文様面全体に砂が付着している。瓦当部裏面下部には、横方向のていねいなへラケズリが施され、瓦当部側面にも側縁周方向のへラケズリがみられる。胎土は緻密で黄白色を呈する。焼成は比較的軟質である。

T02 三巴文軒丸瓦 左に巻きこむ巴を内区に、28個の珠文を外区に配する。珠文帯の内外には圏線があるが、巴の尾端部はそれに接着しない。瓦当部裏面は丸瓦凹面との接合部を指ナデした後、ナデが、この接合線に平行な円弧を描いて施され、下部には横位のナデが施される。瓦当裏面の成形・調整痕は、他にT03・06・07・09などに共通する。瓦当部側面下部は、側縁周方向のナデが施される（図版23 T69）。丸瓦凸面は接合部から後部まで、縦位のナデが施されるが、部分的に縦方向の縄目タタキ痕が残っている。丸瓦部凹面は、全体に布目が付着し、2条の縄痕が、横方向に波状にはしる。玉縁の凹面にも1条の縄痕が認められる。胎土は砂粒を含み、灰白色を呈する。表面は黒褐色を呈し、焼成は軟質である。SX01上層から多く出土した。

T03 三巴文軒丸瓦 左に巻きこむ巴を内区に、29個の珠文を外区に配する。珠文帯の内外に圏線があり、巴の尾端部が内側の圏線に接着する。T02に比べ、瓦当部の直径は大きい。丸瓦部の寸法は同じである。胎土は灰白色で若干の砂粒を含み、焼成は軟質で、表面は煤吸着のため黒褐色を呈する。SX01上層から多く出土した。

T04 三巴文軒丸瓦 左に巻きこむ巴を内区に、24個（復原）の比較的大粒の珠文を外区に配する。珠文帯の内外に圏線があるが、巴文の尾端部は接着しない。T02・03に比べて外区の占める割合が大きく珠文が大である。磨滅がはなはだしいため、成形・調整の痕跡は不明瞭である。胎土には若干の砂粒を含み、焼成は軟質である。

T05 三巴文軒丸瓦 内区には左巻きこみの巴、外区に24個の珠文を配する。巴の頭部は円形に近く、範の彫りが比較的深い。巴の尾端部は圏線に接着する。珠文帯の外側には圏線がない。文様面には砂粒が多く付着する。裏面の調整はT02と似るが、下部に施されたナデ調整が強いため、中央に段がつく（図版23 T66）。T15も裏面調整は同じ痕跡を残している。胎土は若干の砂粒を含み、灰褐色を呈する。焼成は堅質である。

T06 三巴文軒丸瓦 内区に左巻きこみの巴、外区に珠文を配し、珠文帯の内側に圏線がある。巴文は頭部が円形で、尾部が長くのびる。珠文は小粒でまばらである。下方の珠文に註8 範くずれの痕が認められ、文様面全体に砂粒が付着する。胎土は砂粒を多く含み、淡

青灰色を呈する。焼成は比較的軟質である。

T07 天龍寺銘軒丸瓦 天龍寺の3文字を内区に、34個の珠文を外区に配する。文字は上に「天」字、右下に「龍」字、左下に「寺」字をおく。文様面には砂粒が付着する。胎土には若干の砂粒を含み、焼成は比較的軟質で、表面が煤吸着のため黒灰色を呈する。今回の調査で出土した軒丸瓦のうちで最も大型である。SX01から出土した。同文例は後嵯峨天皇陵から出土した。^{註9}

T08 三巴文隅軒丸瓦 巴は頭部が尖形で左巻きこみ、尾端部が珠文帯内側の圏線に接着する。瓦当部外周には円筒形の瓦の接合された痕跡があり、瓦当部裏面全体に指頭押圧痕が残る。胎土は砂粒を含み、焼成は堅質で橙褐色を呈する。鳥衾瓦である可能性も強い。

T09 三巴文軒丸瓦 巴は右に巻きこみ、尾端部が隣の巴の尾部に接着して円圏を形成する。外区に14個の珠文を配する。文様全体が細く、範の彫りは浅い。焼成は軟質で磨減がはなはだしい。胎土は比較的多くの細砂を含み、橙褐色を呈する。

T10 三巴文軒丸瓦 巴は右に巻きこみ、尾端部がT09と同様に隣の巴の尾部に接着する。巴の頭部は円形で、範の彫りは細くて浅い。胎土は砂粒・小石を多く含み、焼成は軟質である。内部は灰白色であるが、表面は黒灰色を呈する。

T11 八弁花文軒丸瓦 長卵形の花弁は中央が凹み、線状の子葉をおく。花弁は一葉ずつ分離しており、弁間文は大きな半円形である。左下方の弁間文上に「上」逆字を陽刻する。文様面全体に砂粒が付着し、周縁にはナデが施される。瓦当部裏面は、丸瓦接合部にそって強い指ナデ、そして全体に不定方向のナデを施した後、下部の側縁周に沿って強いナデを施す(図版23 T67)。瓦当部側面は、丸瓦を接合し、丸瓦凸面に縦位ナデを施した後、側縁周に沿う方向の、一周するナデが施される。胎土は細砂を多く含み、灰色を呈する。焼成は比較的軟質で、表面は黒褐色を呈する。類例は伏見城跡などに知られている。^{註10}

T12 十六弁菊花文棟込瓦^{註11} 花弁は狭長で中央が窪む。弁間文は花弁先端と同様のものをのぞかせる。中房に蕊はない。周縁は広く、側縁周に沿った方向のナデと、周縁内側に面取りが施される。瓦当部裏面は斜方向のナデの後、下部外周に沿ってナデが施される。瓦当部側面は、丸瓦を接合して凸面接合部を縦方向にナデした後、側縁周に沿った方向で一周するナデが施される。丸瓦部は1/4円筒形である。胎土は砂を比較的多く含み、灰白色を呈する。焼成は比較的堅質で、表面は黒灰色である。

T13 複弁八葉蓮華文薨丸瓦 外区に扁円形の珠文を12個配し、珠文帯外側に圏線がある。中房には「+」字を陽刻する。外区には横方向の範くずれが認められる。瓦当部裏面

は全体に指紋が付着し、中央が指頭押圧によって窪んでいる（図版 23 T64）。瓦当部側面には斜方向のヘラケズリ調整が施される（図版 28 T68）。胎土は長石、石英、雲母の他細砂を多く含み、淡青灰色を呈する。焼成はやや堅質である。同范例が常盤仲之町集落跡、相国寺遺跡^{註13}などから出土している。

T14 三巴文薨丸瓦 巴は左に巻きこみ、尾部が長く、笱の彫りは深いが細い。文様面には砂粒が多く付着する。瓦当部裏面は、全体に指頭押圧痕があり、あとで不定方向の指ナデを施す。裏面中央は窪まず、周縁部に丸みをもつ点が T13 と異なっている。瓦当部側面には斜方向のナデの痕跡がわずかに認められる。胎土は長石・石英粒を若干含むが緻密で、黄白色を呈する。焼成は軟質で表面は黒褐色である。

T15 三巴文薨丸瓦 巴は頭部が円形で左に巻きこみ、断面は山形を呈する。文様面には砂粒が付着する。丸瓦部は、他の軒丸瓦がすべて半截円筒形であるのに対し、玉縁がなく、後部で急速に直径を減じる特殊な形態をもつ。丸瓦部凸面には縦位のナデが施されるが、縄目タタキ痕が残る。胎土には若干の砂粒、小石を含むが比較的緻密で橙褐色を呈する。焼成は堅質である。

T16 三巴文薨丸瓦 巴は左に巻きこむ。T14 と較べて巴文が太く、頭部が尖形である点を除けば胎土焼成ともに類似する。

T17 三巴文薨丸瓦 内区は左に巻きこむ巴文、外区に小粒の珠文をまばらに配する。瓦当部は薄い。胎土は若干の砂粒を含み、黄灰色を呈する。焼成はやや軟質である。

T18 八弁花文薨丸瓦 花卉は卵形で輪郭が陽線で表される。瓦当部裏面は、不定方向のナデの後、下部外周に沿ったナデを施す。丸瓦接合後、瓦当部側面に一周するナデが施される。胎土は細砂を多く含み、大粒の石英が目立つ。焼成は比較的軟質である。内部は灰白色を呈するが、表面は黒褐色である。

T19 三巴文棧瓦円形瓦当部 内区に右巻きこみの巴文、外区に 11 個の珠文を配する。巴の頭部が大きく、尾部は短い。文様面には指紋が多く付着する。瓦当部裏面全体に接合のためのカキヤブリを施す。棧瓦接合後に裏面全体を不定方向にナデた後、下部外周に沿ったナデも施す。

T20 三巴文鳥衾瓦 右巻きこみの巴を内区に、大粒の珠文を外区に配する。巴の尾端部が隣の巴の尾部に接着する。胎土は、石英・長石粒を多く含み、灰白色である。焼成は軟質で、表面が黒灰色を呈する。

軒平瓦 出土総数は 101 個体で、瓦当文様によって 23 型式に分類した。同一型式のう

ちで、異範のものをさらに分類することも可能であるが、成形・調整手法は共通している。瓦当文様には、唐草文・剣頭文・連珠文・雷門・文字文があり、室町時代のものは80%以上が唐草文である。瓦当部の横幅から大型と小型に区別でき、前者は軒先などに使用された可能性が強いのに対し、後者は大棟の部分に使用された^{註15}葺平瓦である可能性が強い。臨川寺以前と思われる小型の軒瓦についても同様である。ここでは軒先に使用されない葺平瓦についても、便宜上軒平瓦の項で扱った。^{註16}型式別の計測値、遺構・層位別出土数は表3において示した。

T21 連珠文軒平瓦 23個の珠文を一行に並べて郭線^{註17}で囲む。文様面全体に砂粒が多く付着し、上部に周外縁を形成している。頸部から平瓦部にかけて縦位ナデを施した時に、頸部に横位ナデを施しており、砂粒が横方向の帯状に付着する。凹面には全面に布目が残る。前端（平瓦凹面広端）の瓦当接合部にナデを施す（図版23 T73）。胎土は砂粒を含み黒色の細粒が目立つ。焼成は堅質で淡緑灰色を呈する。SX01上層から多く出土した。同文例が^{註19}三會院および^{註20}臨川寺庭園跡から出土している。

T22 雷文軒平瓦 中心に長方形の点を縦におき、この下方から雷文風の単位文様が左右に三回くりかえされ、周囲を郭線で囲む文様である。成形・調整はT21とほぼ同じ手法によっている（図版23 T72）。胎土は若干の砂粒を含むが細かく、焼成はやや軟質である。内部は黒褐色、外部は黄白色を呈するが、表面は煤吸着のために暗褐色を呈する部分がある。同文例は三會院、臨川寺庭園跡から出土している。

T23 唐草文軒平瓦 中心飾は5弁の半截菊花文を陽刻し、1葉蕨手が左右に3回反転する文様である。成形手法は平瓦部凹面全体に縦位ヘラケズリを施す点以外は、T21と共通する。胎土は細砂・小石を含み、暗褐色を呈し、焼成はやや軟質である。

T24 唐草文軒平瓦 逆心臓形の中心飾下端に発する2葉蕨手が左右に4回反転し、さらに2本の線が伸び、唐草文全体を郭線が囲む文様である。頸部の調整痕はT21に似るが、瓦当接合部に明確な段がつき（図版23 T71）凹面全体を横位ナデ調整するが、一部に布目が残る。胎土は灰白色で砂粒・小石を若干含み、焼成は軟質である。SX01下層から多く出土した。同文例は三會院、臨川寺庭園跡から出土している。

T31・32 天龍寺銘軒平瓦 「天龍寺」の3文字と、日輪月輪を表わす円盤状の突起を陽刻する文様である。文字は中央に「天」、右に「龍」、左に「寺」を配し、右端・左端に雲文を伴った日輪・月輪を表わす。成形手法はT21と同様であるが、平瓦部凹面の布目は縦位ナデによって大部分が消滅している。胎土は長石粒を主とする砂粒、小石を比較的多く

番号	瓦 当 部			丸 瓦 部			遺構・層位別出土数										
	直径	周 幅	縁 高	文様 区径	内区径	外径	内径	厚	SX01 上層	SX01 下層	SK46	第3層	第2層 第1層	その他	計		
01	—	0.9	0.9	—	—	—	—	—				1			1		
02	14.2	1.5 ~1.8		10.7	7.4	13.5 ~14.5	9.5 ~10.0	2.7 ~3.1	7	4					11		
03	15.3 ~15.8	1.6	1.6	11.9 ~12.3	8.7 ~9.0	(13.7)	(9.0)	2.4	5						5		
04	15.5	1.6	1.8	12.1	8.0	—	—	—		3					3		
05	14.6 ~14.9	1.3 ~1.8	1.3	11.5	8.2	14.0	9.5	2.3	1				1		2		
06	(14.4) ~15.2	1.4 ~1.7	1.7	11.6 ~12.4	8.6 ~9.3	—	—	—				1			1		
07	16.7	1.8	1.9 ~2.1	13.0	9.7	16.2	10.8		2						2		
08	12.6	1.5	1.5	10.0	6.6 ~6.9						1				1		
09	12.3	1.3 ~1.5	0.8 ~0.9	9.3	6.3 ~6.5	—	—	—			3			2	5		
10	(15.0)	1.5 ~1.7	0.9 ~1.0	11.9	9.5			2.8				1			1		
11	12.6	1.5 ~1.7	0.8 ~1.0	9.5								1			1		
12	13.4	1.9 ~2.2	0.3 ~0.7	9.6				1.6				2			2		
13	10.4	1.2	0.5	8.0	5.9	—	—	—					1		1		
14	10.3 ~10.5	1.3 ~1.5	0.8	7.5 ~7.9		10.1	7.5	1.3	2	3		1			6		
15	10.7	1.3 ~1.6	1.0 ~1.2	7.8				1.9			20	19	9	3	51		
16	—	1.5	0.7	(8.6)		—	—	—		1					1		
17	—	—	—	(8.4)	(6.8)	—	—	—			1				1		
18	9.0 ~9.2	1.1 ~1.2	0.6	7.0								1			1		
19	9.2 ~9.7	1.1 ~1.5	0.5 ~0.7	6.5	4.0								5		5		
20	—	1.3 ~1.5		—	—							1			1		
その他									1	3	4	4	3	4	19		
(単位 cm、カッコ内は復原値)									合 計		18	14	29	32	19	9	121

表2 軒丸瓦計測表(遺構・層位別出土数)

番号	瓦当部										平瓦部 厚	遺構・層位別出土数							
	幅	弧深	縦	同縁		文様区		内区		SX01 上層		SX01 下層	SX46	第3層	第2層 第1層	その他	計		
				幅	高	横	縦	横	縦										
21	23.5	3.3	3.7	0.8 ~1.3	0.7	21.8	1.6	21.2	1.2	2.2	9			2		1	12		
22	(27.7)	(4.2)	5.8	1.2	1.1	(25.2)	3.2	(24.3)	2.6	3.2		1					1		
23	(25.5)	(4.1)	5.4	1.3	0.5	(24.0)	3.5			3.1		1					1		
24	26.1	3.2	4.7	0.9 ~1.5	0.7	24.0	2.6	23.5	1.6	2.9	6	5		1			12		
25	—	—	5.1	0.9 ~1.3	0.7 ~0.9	—	2.4	—	2.0	2.4	1						1		
26	—	—	(4.2)	0.6	0.6	—	2.4			2.4	1						1		
27	—	—	6.2	0.9	0.9	—	3.8	—	2.9	3.8				1			1		
28	—	—	—	1.1 ~1.3	1.0	—	—	—	2.4	—				1			1		
29	—	—	4.7	0.7	0.7	—	3.3	—	2.4	2.9		1					1		
30	—	—	4.6	0.6 ~0.8	0.4 ~0.5	—	3.1			2.2				1			1		
31	—	—	5.7	0.8 ~1.0	0.8 ~1.0	—	3.9			2.7	1	1					2		
32	—	—	5.7	0.8 ~1.0	1.0 ~1.2	—	3.3			2.7	1						1		
33	—	—	—	0.8	0.9	—	—			—					2		2		
34	—	—	1.7							1.4		1					1		
35	—	—	—							1.2		1					1		
36	(19.8)	(2.3)	3.5	0.5 ~0.8	0.5	(18.8)	2.2	(18.2)	1.7	1.9		1					1		
37	—	—	3.0	0.6	0.4	—	1.9	—	1.6	2.4			2				2		
38	—	—	3.1	0.7	0.4	—	1.8	—	1.6	2.3				1			1		
39	(18.5)	(1.8)	3.1	0.7	0.3 ~0.4	(16.6)	1.8			—						1	1		
40	〃	〃	3.1	0.7	0.4	〃	1.9			—			1				1		
41	—	—	3.1	0.7	0.5	—	1.7			2.3			2				2		
42	—	—	2.8	0.6	0.2 ~0.3	—	1.6			2.4			1				1		
43	17.7	1.8	3.1	0.7	0.2 ~0.3	15.8	1.8			1.9			23	4	13	1	41		
その他														1	7	4	12		
(単位 cm、カッコ内は復原値)											合計		19	12	29	11	23	7	101

表3 軒平瓦計測表(遺構・層位別出土数)

含む。焼成は前者は軟質で灰白色を呈し、後者は堅質で青灰色を呈する。

T33 天龍寺銘軒平瓦 文字を右から「天」「龍」「寺」と配する点、日輪に伴う雲文の形状が T31・32 と異なるが、胎土、成形、焼成ともに T32 に似る。同文例は後嵯峨天皇陵から出土している。^{註21}

T34・35 剣頭文薨平瓦 両者とも瓦当部は折り曲げて成形し、平瓦部凹面には布目が残る。胎土は砂粒をわずかに含むが細かく、焼成が軟質で磨滅がはなはだしい。

T36 唐草文薨平瓦 中心飾は蕨手を対向させ、左右に1葉蕨手が5回反転し、唐草文全体を郭線が囲む文様である。頸部には明確な段がつき、平瓦部凹面には布目が残る。胎土は砂粒を含み灰褐色を呈する。焼成は軟質で磨滅がはなはだしい。

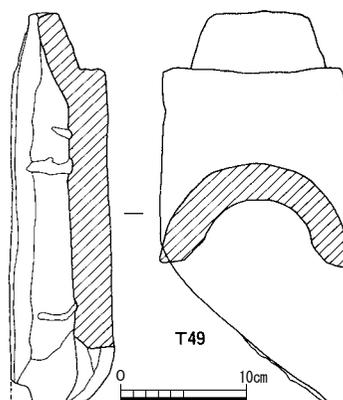
T37・38 唐草文薨平瓦 中心飾は7弁の半截菊花を陽刻し、1葉の蕨手が左右に5回反転する。文様面に砂粒が付着する。接合部は平瓦凹面のヘラケズリ調整を除けば T21 と同じ手法による。胎土は細砂を多く含み、焼成が堅質である。同文例が相国寺遺跡から出土している。^{註22}

T39・40 唐草文薨平瓦 中心飾は7弁の半截菊花を陽刻し、1葉の蕨手が左右に4回反転する文様である。同文例は大報恩寺本堂の大棟に使用されたものが知られている。^{註23}

T43 唐草文薨平瓦 中心飾は7弁の半截菊花を輪郭線で表わし、1葉の蕨手が左右に3回反転する文様である。文様面には砂粒が付着する。接合部は T21 と同じ手法によっているが、瓦当部裏面と平瓦凸面との接合部には明確な段がつく。平瓦部凹面には軽くナデが施される。胎土は若干の砂粒・小石を含むが細かく、焼成は比較的堅質である。橙灰色を呈する。

(2) 丸瓦・平瓦 (図版 19、第 13 図)

丸瓦 一括資料である SX01 出土のものから、直径計測可能な 71 点について分類を試みた。挿図 14 に示すように、黒点で表わした丸瓦は、一点を除いて、外径で約 4cm、内径で 3.4cm の開きがあるが、約 60% の丸瓦が外径 14 ± 0.6 cm、内径 9.2 ± 0.5 cm の範囲に含まれる。玉縁を除く長さの計測可能なものは 10 点のみであるが、直径の大きいものほど長い傾向が認められよう。SX01 出土の軒丸瓦計測値をこれと比較すると、大



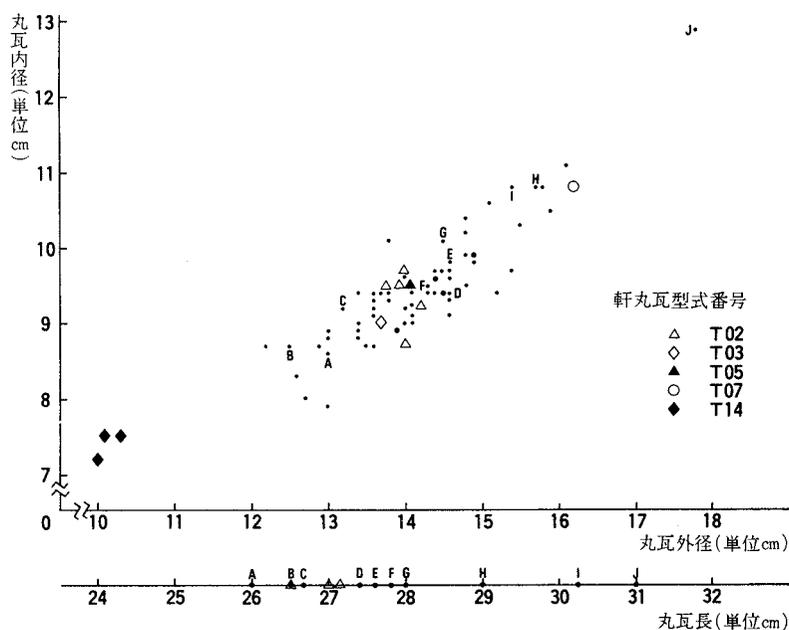
挿図 13 谷丸瓦 (1:6)

型軒丸瓦が丸瓦の集中する範囲と一致し、小型軒丸瓦には対応する丸瓦が存在しないことがわかる。すなわち前者が瓦葺屋根に共に葺かれたのに対し、後者はこれと異なる用途をもっていたわけである。

SX01 出土丸瓦の成形・調整手法は、大きさにかかわらずほとんど同一である。凸面は縄目タタキの後に縦位ナデ調整が施され、凹面には明確な糸切痕が認められる。凹面横方向に、波状にうねる縄痕がはしる（図版 23 T75）。この縄痕は 2 条のものが多いが、T47 のように 1 条のものもある。側面と凹面側縁はヘラケズリ調整が施され、凹面前部は大きく面取りされる。胎土は砂粒を含み、黒色細粒の目立つものが多い。焼成状態はまちまちである。

T49 は谷丸瓦で、前端部右隅から 45 度の角度で截線をいれ、焼成後破截したらしい。凹面縄痕は特異である（図版 23 T76）。胎土は他の丸瓦と同じである。焼成は堅質で淡灰色。表面は部分的に黒灰色ないし銀色を呈する。

平瓦 SX01 出土平瓦のうち、長さ、または幅の計測可能なものは 19 点であった。長さは 28.2～30.0cm、広端幅 23.0～26.0cm、狭端幅 20.3～23.0cm の範囲に計測値が分布する。広端幅 24.0cm、狭端幅 22.5cm、長さ 29.5cm が平均的な値である。成形・調整手法はすべてに共通する。凸面には糸切痕、格子目タタキ痕があり砂粒が一面に付着する。凹面は縦

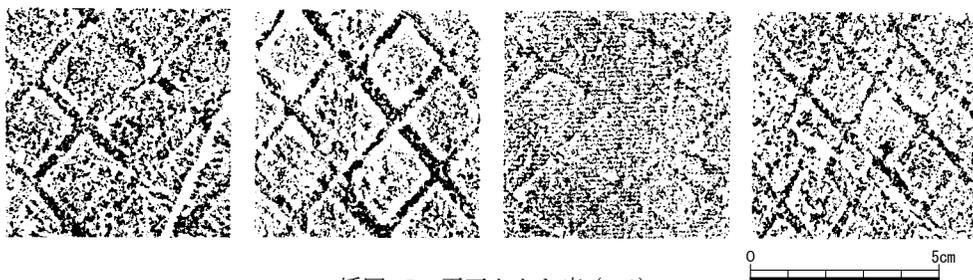


挿図 14 軒丸瓦・丸瓦寸法対照

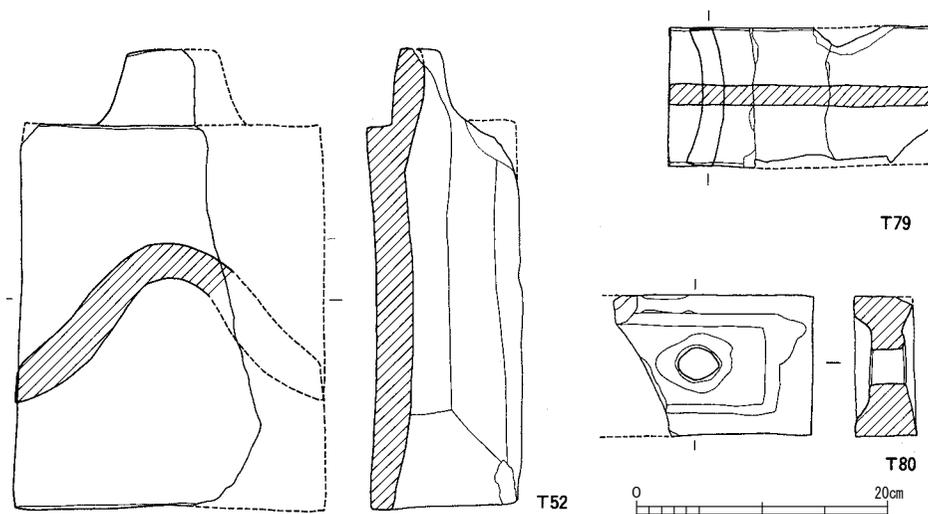
位ナデが全面に施されるが、一部に布目の残るものがある。狭端縁はヘラケズリによって面取りされ、側面にはヘラケズリが施される。胎土は若干の砂粒を含み、黒色鉱物細粒が目立つものが多い。タタキの原体は少なくとも4種は確認された(挿図15)。また、凹面中央縦方向に格子目タタキ痕の圧痕のあるもの(図版23 T78)、凸面中央縦方向にタタキ痕の消えているもの(図版23 T76)が多く検出された。

(3) 道具瓦(図版19・20、第14図、挿図17)

伏間瓦 SX01やSK46から多く出土したが、長さ・幅など計測可能なものはT52の1点のみであった。全長36.5cm、玉縁を除く長さが30.5cm、幅24.5cm(復原)、高さ12.0cm(復原)である。凹面には全体に糸切痕と布目が残り、前部は大きく面取りする。凸面はていねいなナデが施される。胎土は若干の砂粒を含むが細かく、灰白色を呈する。表面は煤吸着によって黒褐色である。SX01出土。



挿図15 平瓦タタキ痕(1:2)



挿図16 伏間瓦・熨斗瓦・長方形有孔瓦(1:6)

鬼瓦 SK46 から 2 個体分出土し、これと接合可能な破片が SK45、SK10、第 6 区第 3 層から出土した。ともに鬼面鬼瓦である。

T53 額両側に上方を向く一対の角、下顎に上方を向く大小二対の牙がある。約 1cm 角の粘土を並べて接着して顎髭を表わし、下顎両端に放射状の陰刻線を施した山形の髭がある。口唇は顔面の端から端まで裂け、上下 2 列の歯が表わされる。眼球は斜め下方を向き、額から連続する脛が眼球の前方を覆う。脛上には放射状の眉毛を陰刻した山形の眉があり、眉間にはしわ状の突起がある。額上部は欠損しているため不明である。珠文帯は、後部板状の部分（以下板部と呼ぶ）に彫りこまれ、左右ともに 8 個の珠文がある。裏面に糸切痕が残り、中央縦方向に把手をケズリ出す（図版 24 T53）。顔部の裏面と、板部把手の前面には縦方向の棒を抜き取った痕跡が残り、顔部裏面から板部にかけてヘラケズリとナデが施される。

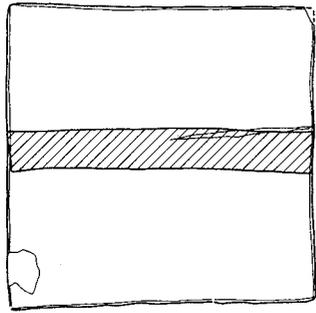
T54 額に一対の角、下顎から上方に向いた一対の牙がある。顎髭は陰刻線で表わされる。眼球は下方を向く。額の大部分、口から顎にかけての中央部などが欠損しているため不明な箇所もあるが、成形・調整痕は T53 とまったく共通する。胎土も同様で、黒色の細粒が含まれ、長石・石英細粒も若干認められる。焼成は堅質で淡緑灰色を呈し、表面は煤吸着のため、黒灰色ないし銀色の部分がある。

熨斗瓦 SK46 と付近の包含層から多数出土したが、他からは検出されていない。T79 は SK46 出土の小型の熨斗瓦である。平瓦と異なり平面形は長方形で広端・狭端の区別はなく、端縁の面取りもない。凸面全体に糸切痕と砂粒付着が認められる。凹面はていねいなナデ、側面はヘラケズリが施される。胎土は細砂を多く含む。T79 は焼成が比較的堅質で黄灰色を呈するが、他に灰褐色で軟質のものもあり一定していない。

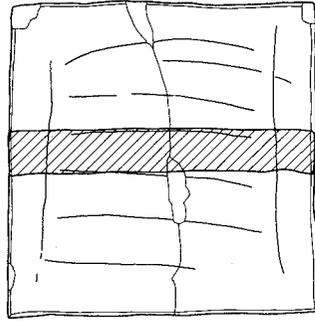
(4) 甗類（図版 21・22、挿図 15～17）

長方形有孔甗 SX01 から出土した T55 が孤例である。幅 11.0cm、厚さ 4.8cm、断面が H 字状を呈する。周縁部 1.5～2.5cm を残して上面下面の中央が凹み、長中軸線上に直径約 3cm の穴があげられる。全体に縄目タタキ痕があり凹部に最も顕著である。胎土は砂粒を含み、焼成は比較的軟質で淡緑灰色を呈する。

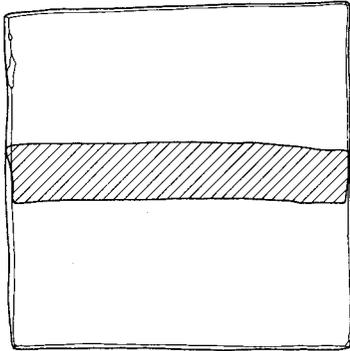
敷甗 T57～60 は平面正方形の敷甗である。SK46 出土のものうち、71 個体が完形品である。大型と小型に分類でき、後者は上面一辺が 26.0cm 前後、厚さ約 3.5cm。前者は上面一辺が 27.3cm 前後、厚さ約 4.5cm である。成形・調整、胎土の特徴は大部分共通し



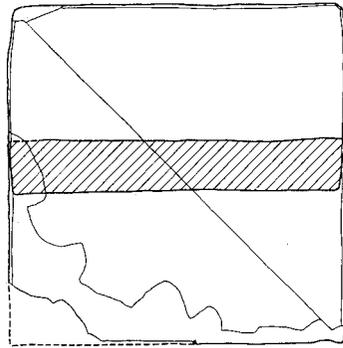
T57



T58



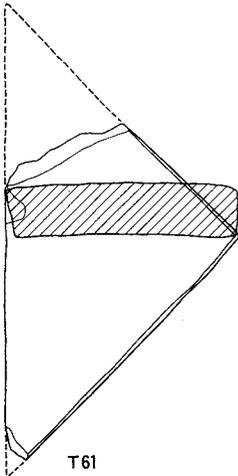
T59



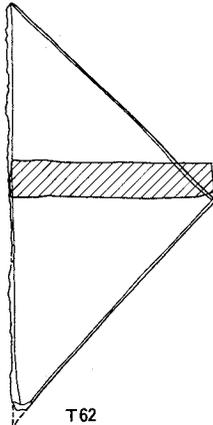
T60



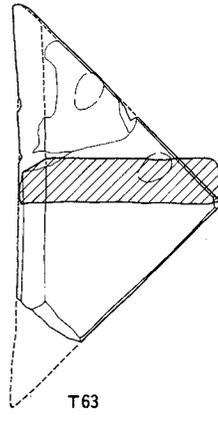
插图 17 方形敷毡 (1:6)



T61



T62



T63



插图 18 三角形敷毡 (1:6)

ている。上面は若干凸面を呈し、表面の磨滅が著しいが、下面は一辺が上面より短く、若干凹面を呈する。糸切痕、離れ砂の付着が凹面に認められる。上面側縁から側面はヘラケズリ調整を施す。T58 は小型の方形敷瓦上面に梯子状の陰刻のある特殊な例である。また、大型のものなかには T60 のように上面对角線方向に陰刻線を施す例も数点検出された。

T61 ～ 63 は三角形の敷瓦である。方形敷瓦を半截した大きさであるため大型と小型の 2 種類ある。方形敷瓦に截線を入れ、破截した面をヘラで調整するもの (T61) としないもの (T62) があり、破面の縁部を面取りするもの (T63) もわずかに検出された。

(5) 刻印

SX01 出土の方形敷瓦、丸瓦、平瓦で刻印のあるものが合計 31 点検出された。SK46 出土の敷瓦には刻印のあるものは検出されなかった。刻印の場所は、方形敷瓦は側面、丸瓦は後端面、平瓦は広端面である。竹管文、菊花文の刻印があるが、文様自体が単純で不明瞭なものが多いため、原体によって細分するのは不可能であった。

(6) 小結

軒瓦の時期と特徴 SX01 出土の T14・16・34・35 は、瓦当文様や成形手法から、臨川寺以前の遺物である可能性が強い。軒丸瓦は瓦当部裏面の指頭押圧痕が顕著で、軒平瓦は瓦当部を折り曲げ成形するなど、平安末期の京都近辺で作られたと思われるもの^{註24}の成形手法と軌を一にする。これは、京都においては鎌倉時代前期に現われて室町時代に典型的な、いわゆる「南都系」^{註26}の軒瓦に用いられる手法とは明らかに異なる。T01・13 は遺構に伴わない遺物であるが、他遺跡の出土例から、13 世紀前半ごろのものかと思われる。これらの軒丸瓦も、いわゆる「南都系」のものとは手法を異にしている。

SX01 下層出土の T24 は、三合院創建時に使用されたとと思われる軒平瓦と同文あるいは同範である。当遺跡においては、出土状況から、T02 と組みあわせて使用された可能性が強く、共に初期の臨川寺に関係する遺物であろう。T21 は SX01 上層から出土し、三合院にも同文例が若干みられるため、これも初期の臨川寺に関係する遺物で、出土状況から当遺跡においては T03 との組みあわせが考えられる^{註29}。SX01 出土軒瓦のうち、T24 と T02、T21 と T03 の 4 点の軒瓦が約 60% を占める。SX01 から出土した 2 組の軒瓦の成形手法はそれぞれ共通点が多い。軒丸瓦は、瓦当部の裏面は凹凸が少なく断面が直線的であり裏面下部に横位ナデを施す点、軒平瓦は平瓦凸面広端縁を切りおとして瓦当部になる粘土を接

合するのが特徴である。

SK46 出土の T37・43 の瓦当文様は、1380 年代創建の宝幢寺・相国寺関係の軒平瓦^{註30}、八坂法観寺の永享再建時と思われる軒平瓦^{註31}に共通点が認められ、年代を知るうえでの手掛りとなる。成形手法については、SX01 出土の軒平瓦と共通する。軒丸瓦の成形手法についてもこれと組になる T15 は SX01 出土のものと同通する。

T11・12 は遺構に伴わない遺物であるが、瓦当文様、成形手法などには室町時代のものにみられない要素が加わり、伏見城や江戸時代初頭頃の遺物に類例がみられる。瓦当部裏面は、丸瓦接合後に不定方向のナデを施し、下部外周に沿って強い指ナデを施す点、瓦当部側面を一周する横位ナデを施す点の特徴であり、胎土・焼成ともに類似し、いわゆる棧瓦質である。

室町時代の瓦製作技法の復原 SX01 出土の丸瓦・平瓦と軒瓦から、当時の瓦の成形時に用いられた手法、及び工具などの復原を試みた。丸瓦・平瓦の成形は、粘土板を作るまでの第一次成形、型を用いて概形を作る第二次成形、細部の成形や表面の調整を行う第三次成形に分けた。軒瓦の成形は、丸瓦あるいは平瓦と瓦当部を作る第一次成形、両者を接合する第二次成形、瓦当部裏面・側面など細部を調整する第三次成形の 3 段階に区切られた。また、各段階毎にさらに細かい諸工程が含まれる。

丸瓦 [第一次成形] 丸瓦 2 枚分の大きさを平面形とする粘土角材をつくり、糸あるいは針金を使って、所定の厚さの粘土板を切りとる。[第二次成形] 回転台上の木型に、抜取縄のついた布筒をかぶせ、粘土板をこれに巻きつける。外面（丸瓦凸面）を縄を巻いた叩き板でタタキシめ、型に密着させる。このときに外面の縄目タタキ痕、内面（丸瓦凹面）の布目及び抜取縄痕（図版 23 T75・76）がつく。縦方向のナデ、ヨコナデもこの時に外面に施す。こうして成形した丸瓦円筒を抜取縄を上方に引いて型からはずし、布筒を除去する。[第三次成形] ある程度乾燥した円筒を 2 分割し、凹面側縁、前端の面取り、側面ヘラケズリ^{註32}をする。

平瓦 [第一次成形] 平瓦 1 枚の大きさを平面形とする粘土角材をつくり、糸あるいは針金で所定の厚さの粘土板を切りとる。[第二次成形] 凸形台上に布を敷いて、粘土板をおき、凸面を格子目の刻みのある叩き板でタタキシめる。このとき凸面に格子目タタキ痕、凹面に布目が付着する。[第三次成形] 凹形台上に離れ砂^{註33}を敷き、生瓦を裏返しておく。側面、凹面側縁にヘラケズリ、凹面前端縁に面取りを施す。凹面の布目は軽くナデで消す。凸面側縁には、凹形台からはみだしたと思われる部分がほとんどにあり、第 3 次成形時に

凹形台が平瓦平面形を整える定規としての役割をもっていたと考えてもよからう。また、凸面中央縦方向のタタキ痕の消滅、凹面中央縦方向のタタキ痕圧痕（図版 23 T77・78）は、第三次成形後の乾燥時に生じたものであろう。

軒丸瓦 [第一次成形] 范に離れ砂を敷き粘土を押しこんで、周縁からはみ出した余分な粘土を削り取る。このときに離れ砂が付着し、はみ出しの痕跡を残す（図版 23 T70）。瓦当部裏面は、断面でも明確なように凹凸がほとんどなく平板であり、次の段階で裏面を糸切りによって平坦にした可能性もある。次に丸瓦を接合する部分に溝をつける。[第二次成形] 丸瓦を瓦当部裏面の溝にさしこみ、粘土を補足して接合する。瓦当部裏面・側面のナデ（図版 23 T65・66・69）、丸瓦部凸面のナデ^{註35}を行い范をはずす。[第三次成形] 丸瓦部側面・凹面側縁、玉縁部凹面にヘラケズリを施す。

軒平瓦 [第一次成形] 凸形台上の平瓦の凸面広端縁を切り取る。[第二次成形] 平瓦広端の、削り取った面（図版 23 T74）に瓦当となる粘土を接合し、范をあてる。范からはみ出した頸部の粘土を削りとり范をはずす。平瓦部凸面、頸部をナデる（図版 23 T72）。[第三次成形] 軒平瓦を凹形台におきかえ、側面・凹面側縁をヘラケズリする。このとき凹形台からはみ出しができ、凹形台の痕跡がつく（図版 23 T71）。また、前端縁の面取りは、平瓦と瓦当部の接合線に施すものが多い。凹面の布目は、全面に残るもの（T21）とていねいにナデて消すもの（T24 他）があり、凹面調整のていねいなものほど、頸部の段（図版 23 T71）が明確なようである。

以上、SX01 出土例から、軒瓦、丸瓦・平瓦の製作技法復原を試みた。丸瓦・平瓦と、軒瓦の丸瓦部・平瓦部の成形手法は全く共通し、それぞれを比較することによって、軒瓦に使用する丸瓦・平瓦は、第二次成形直後のものであることは明らかで、瓦当部接合後に普通の丸瓦・平瓦と同一の調整を行ったものである。また、丸瓦凹面にはすでに抜取縄痕が出現していること、平瓦・軒平瓦の第三次成形時には凹形台の使用されたことも確認することができた。

SK46 から出土した室町時代の鬼面鬼瓦についても、製作技法の復原を試みたが、成形には板部を形作る第一次成形、顔面をとりつけ、顔の各部に粘土を盛りあげて整える第二次成形、裏面に把手を作り出し、余分な粘土をかきとる第三次成形の諸段階に分かれる。[第一次成形] 粘土角材から板部となる粘土板を、所定の厚さに糸または針金で切りとり外形を切り抜く。[第二次成形] 板部を水平に置き、中軸線上に直径約 4.8cm の棒^{註36}をおいて顔部となる粘土板を棒にかぶせるようにして両側縁を板部に接合する。珠文帯の溝をつくり

竹管状の^{註37}道具で珠文となる粘土玉を貼りつける。顔面に、眼球・鼻・頬・牙・角・額・髭・眉になる粘土ブロックを貼り付けて大まかに形を作り、細部の整形、調整を行なって陰線線を施す。〔第三次成形〕第二次成形時に用いた棒を抜き取り、板部裏面から周縁部と中央縦方向の把手を残して穴をあける。顔面裏側の余分な粘土をかき取り、板部と顔部の接合箇所をナゲる（図版 24 T53）。

当遺跡から出土した室町時代の鬼瓦は、鎌倉時代の^{註38}鬼瓦と比較して、板部の成形や把手の作り出し方に共通点が多く、近世の鬼瓦と比較すると鬼面の表現、板部の概観に関しては共通点が多いが、製作技法はかなり異なるようである。

註

- 1 伏間瓦は、棟瓦・雁振瓦・冠瓦などとも呼び、棟の最上段に置く道具瓦。
- 2 棟を高くする積材として用いる。
- 3 瓦当をもつ丸瓦・平瓦を葺きこんだ大棟を葺棟と呼び、この葺棟に使用される瓦当をもつ丸瓦・平瓦を「葺丸瓦」・「葺平瓦」両者をあわせて「葺瓦」と呼んだ。「軒丸瓦」、「軒平瓦」、「軒瓦」の名称と同様に、使用箇所を冠してこう称した。ここで「棟」の字を使用せずに「葺」としたのは、「棟瓦」は伏間瓦を、「棟平瓦」は熨斗瓦をさす場合があり、混乱をさけるためである。
- 4 この節では瓦を軒瓦、丸瓦・平瓦、道具瓦に、軒瓦を軒丸瓦、軒平瓦に分類した。「瓦当をもつ丸瓦」、「瓦当をもつ平瓦」あるいは両者を総称して、「軒丸瓦」、「軒平瓦」、「軒瓦」という名称が現在是最も広く採用されている。ここでは通例に従ったが、これらの名称の使用には問題がある。すなわち、「軒丸瓦」、「軒平瓦」の名称は本来「軒先に用いる丸瓦」、「軒先に用いる平瓦」という、使用位置に基づく明確な定義をもっている〔足立 康「軒瓦の名称に就いて」考古学雑誌 26ノ12 昭和11年(1936)〕。現在ではこの定義にかかわらず用いられる傾向がある。たとえば葺棟に使用する葺瓦に用いられる場合がそうであり不適當であることはいうまでもない。一方、軒先に使用する軒丸瓦・軒平瓦と葺棟に使用する葺丸瓦・葺平瓦は、それぞれ形態の上では共通点が多く、まったく同一形態のものが軒先と葺棟の両方に使用される場合も考え得るため、形態によってこの二者を截然と区別するのは困難である。したがって、この両者を含む「瓦当をもつ丸瓦」、「瓦当をもつ平瓦」に対しては使用箇所ではなく、形態に基づく名称も必要であろう。

「鏡瓦」、「宇瓦」は、奈良時代から室町時代の文献や器物銘に散見する名称であり、前者は「瓦当をもつ丸瓦」の名称としてふさわしいものであるが、後者は本来は使用箇所に基づくものであるため、若干問題があろう。

- 5 計測表は、実測図に用いたものと同一個体。写真図版は、必ずしもこれと同一個体とは限らない。
- 6 『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』（財）京都市埋蔵文化財研究所 昭和53年（1978）では、ここにあげた軒丸瓦をPL18-6の類型として処理したが、臨川寺の遺物整理の段階でこれが同範であることが判明したのでここに掲載した。
- 7 巴は、頭部のまわる方向を「巻き込む」あるいは「巻き込み」という言葉で表わした。「巻く」あるいは「巻き」という言葉は、外方へ向かって廻る方向をさす場合と、内方へ向かって廻る方向をさす場合があるため、混乱をさけるためにこの用語を使用した。
- 8 瓦当文様を刻んだ範が、過度の使用によって文様が磨滅したり、くずれることをこう呼ぶ。木製範の場合は木目方向に範くずれすることが多い。
- 9 「陵墓関係調査概要」第4図『宮内庁書陵部紀要第26号』昭和50年（1975）
- 10 星野猷二「伏見」『古代学研究69』図版IV-1 昭和48年（1973）
- 11 熨斗瓦の間に積む、瓦当をもった瓦である。瓦当の裏面には通常の軒丸瓦の場合よりかなり短く、4分円筒程度の「丸瓦部」が接合される。T12は棟込瓦としては大型で、現在の西本願寺築地に使用されているように、多少異なった用途もあったと思われる。
- 12 『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』（財）京都市埋蔵文化財研究所 昭和53年（1978）この遺跡では土壌から個体の同範例、あるいは同意匠の例が出土したが、これらに対応する丸瓦がまったく検出されていない。この型式の軒丸瓦を甍丸瓦とした理由のひとつである。
- 13 当研究所の行った、成安女子大学構内相国寺遺跡昭和52年（1977）第一次調査で出土。
- 14 伏間瓦のうち、棟の端に用いられるもので、鳥休（円形瓦当のある部分）をもつもの。ここでは瓦当部についてのみふれる。
- 15 註3参照。
- 16 註4参照。
- 17 軒平瓦の文様区内に、周縁に平行に表わされた区画線を郭線と呼んだ。軒丸瓦の文様区内の圏線に対応する用語として用いた。
- 18 瓦当製作時に、範の周縁よりも瓦当用の粘土が大きく、本来の周縁の外側にはみだし

たためにできた周縁の外縁部。

- 19 臨川寺遺跡昭和 51 年 (1976) 発掘調査。検出された遺構は、臨川寺創建時の三會院に関連するものと思われるため、この調査によって検出されたものを「三會院出土」とした。
- 20 臨川寺庭園遺跡昭和 44 年 (1969) 発掘調査。夢窓国師自作の庭園跡であると考えられ、略して臨川寺庭園跡と呼んだ。
- 21 註 9 参照。
- 22 同志社大学校地学術調査委員会『同志社中学校体育館建設予定地発掘調査概要』昭和 50 年 (1975) 第 22 図 9
- 23 京都府教育庁文化財保護課『国宝大報恩寺本堂修理工事報告書』昭和 29 年 (1954) 図版 37
- 24 平安博物館『平安京古瓦図録』昭和 52 年 (1977) 図録掲載番号 242 ~ 245、560 ~ 574 鳥羽離宮跡調査研究所『栢杜遺跡調査概報』昭和 49 年 (1974) 「八角堂出土の瓦」京都府『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第 15 冊 昭和 9 年 (1934) 「岩倉村瓦窯址遺物」図版 14、21
- 25 『栢杜遺跡調査概報』(前掲) 「方形堂出土の瓦」
京都市文化観光局文化財保護課『法性寺跡 [光明峯寺・奥院跡]』京都市埋蔵文化財年次報告 1976- III 昭和 52 年 (1977) 図 5-1、2 図 6-7、8
東福寺三門跡発掘調査(京都府文化財保護課調査)で出土した軒瓦。
- 26 興福寺、法隆寺をはじめ、奈良の多くの寺院跡から出土する鎌倉時代の軒瓦に共通する瓦当文様や製作技法などを漠然と「南都系」という言葉で呼んでいるが、京都市内から出土した「南都系」軒瓦による限りでも、その内容はさほど単純ではない。たとえば、栢杜丈六堂出土の軒平瓦には A、B、C の 3 種あり、同文あるいは類例は京都・奈良などでかなり多く知られているが、それぞれの分布には大きな差が認められる。また、成形手法については、A 種が平瓦凸面広端部に粘土を貼りつけて瓦当を成形するのに対し、B 種は平瓦凸面広端縁を切りおとした面に粘土を接合して瓦当を成形するという大きな違いがある。C 種は B 種の手法に類似するが、若干相異点がある。京都において室町時代に用いられた軒平瓦は B 種と共通するものが多いように思われる。
- 27 T13 は常盤仲之町集落跡、相国寺遺跡のほか、常盤井殿町遺跡、京大病院内遺跡、醍醐寺境内、松尾神社に同文または同範例があるが、T01 と共に時期は明らかでない。
- 28 SX01 出土軒瓦のうち出土数の多いものは T02・03・14・21・24 の 5 型式であるが、

混入したものである可能性が強い T14 を除くと 4 型式である。T02・24 は SX01 上層・下層から多く検出されているが、T03・21 は、上層からのみ検出されている（表 2・3）ためにこの組み合わせを推定した。出土絶対数が少なく、推測の域を出ないが、この二組の軒瓦の間には製作時期及び廃棄時期に関しては大きな隔たりはなく、それぞれの組に対応する建造物を 2 棟想定してもよからう。

- 29 28 と同。
- 30 鹿王院の総門脇築地塀に塗りこめられた軒平瓦、同志社中学校体育館建設予定地の相国寺関係遺跡（前掲）出土軒平瓦に多くみられる瓦当文様は、中心飾は輪郭を陽線であらわす半截菊花文で、1 葉の蕨手を左右に数回反転させる。
- 31 昭和 52 年（1977）当研究所調査で出土。文様構成は註 30 と同様である。
- 32 第 3 次成形時に凹形の台を使用した可能性も十分考えられるが、痕跡は確認できなかった。
- 33 ここでは瓦製作時、粘土板や粘土塊を台、あるいは笥によって成形する際に、台あるいは笥にあらかじめ砂をまいておき、成形後に粘土を離脱しやすくする手法、または砂のことをこう呼んだ。
- 34 余分な粘土を削り取る工程は、丸瓦接合後に行ったとも考え得る。
- 35 ヘラケズリは、胎土がある程度乾燥した後に施す手法であるが、軒丸瓦の丸瓦部には、接合前にヘラケズリを施した痕跡はまったくないため、丸瓦は第 3 次成形以前のものを使用したわけである。また、丸瓦部凸面のナデ手法は、胎土に可塑性がある、乾燥前の段階のものが用いられたことを示す。
- 36 顔部成形の際に支えのはたらきをもつものであろう。
- 37 内径 1.8cm、外径 2.2cm の筒状であったと思われる。
- 38 栢杜遺跡方形堂出土。1 枚板の鬼瓦であるが、把手は中央縦方向に、裏面からケズリ出している。

3 石製品・金属製品

(1) 石製品

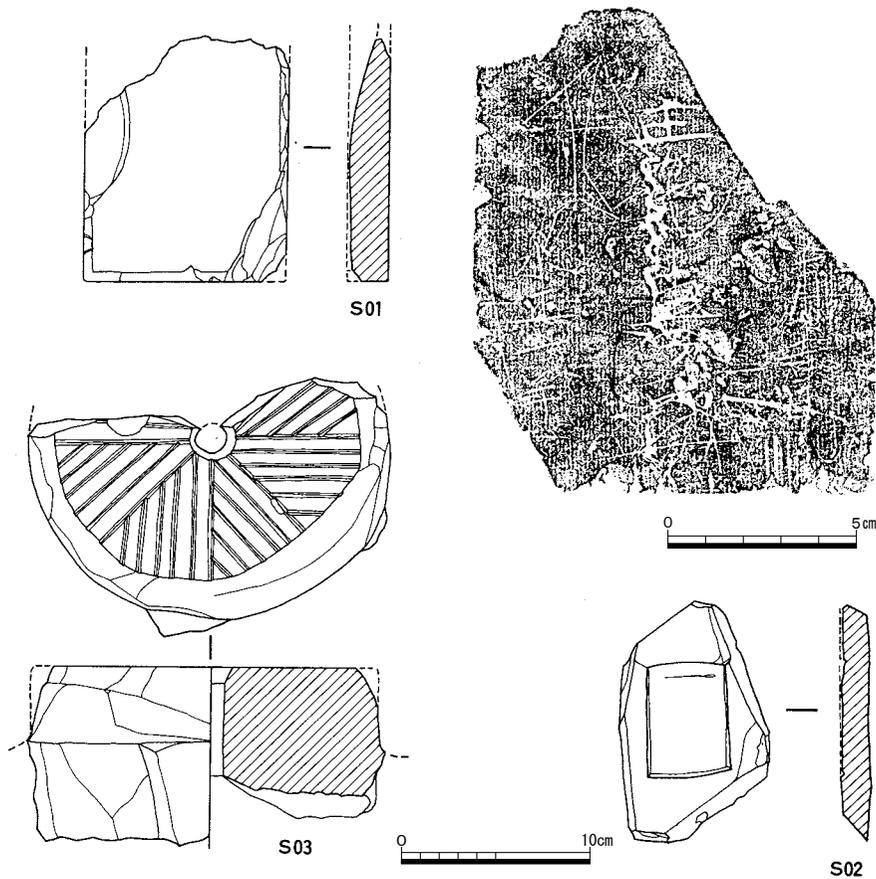
硯 S01はBトレンチ第3層から出土した。粘板岩製で、平面形は長方形である。上面の調整はていねいで、下面には、下記の年号日付、人名が陰刻されている。

五月吉日

主亀寿 花押

永正六年

S02はSX01から出土した粘板岩製の硯である。上面のみていねいな調整が施されてい



挿図 19 硯・下面拓影、石臼 (1:2) (1:4)

るが、側面・下面はまったく調整が施されない粗製品で、平面部は不整形である。

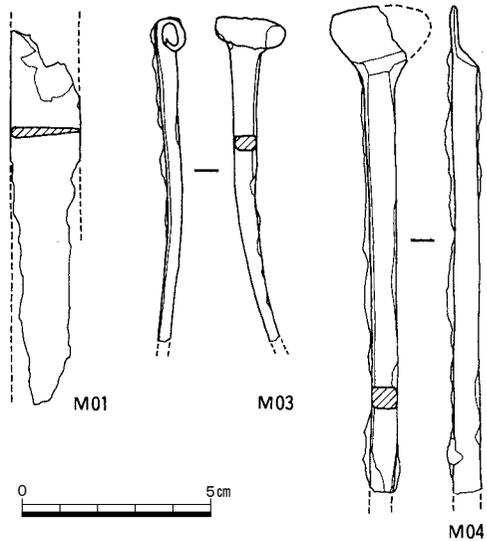
白 S03はSK20から出土した花崗岩製の茶臼である。臼の目は八分画六溝に刻まれているが、磨滅がすすんでいる。受鉢部分の欠損した下臼である。

(2) 金属製品

鉄製刀子 M01はSX01から出土した刀子であるが、欠損部が多く、錆が進行しているため、全体の形は不明である。

鉄釘 SX01から多く出土したが、ほとんどのものが細片であった。原型をほぼ復原できるのはM02・03の2点のみである。ともに全長約9cm、横断面が中央で0.35×0.5cmであり、頭部は叩いて扁平にした後、丸く折り曲げたものであろう。M04は現存長13cm、横断面0.6×0.6cmの鉄釘で、頭部は扁平であるが折り曲げられていない。

銭貨 M05・06は熙寧元寶で、M07は寛永通寶である。これらは第2層から出土した。



挿図20 鉄製刀子・鉄釘 (1:2)



挿図21 銭貨 (1:2)

第4章 総括

臨川寺に関連する発掘調査はこれまでに4回実施され、堂宇跡、庭園跡が確認されたが、臨川寺以前の遺構はまったく検出されていなかった。今回の調査は、これら既発表資料に基づいた調査計画を立てたため、臨川寺以前の遺構についてはあまり考慮していなかった。ところが予期せず、平安時代の遺物を包含する遺構が確認されたのである。最も古いものは、平安時代初期の土器類、瓦などを出土した東西方向の溝 SD09・SD13 である。南北方向の溝 SD11 は平安時代末～鎌倉時代の遺物を出土し、SD12 もこれと同時期と推定できる。SD09・SD13 は上層の遺物から、鎌倉時代～室町時代にはすでに埋没し終わっているが、この両溝の下限と、SD11・SD12 の上限との前後関係については明らかではない。

『臨川寺領大井郷絵図』、『応永鈞命図』では、芹川（現在の瀬戸川）の流れは、造路から大堰川まで、臨川寺東辺を一直線に南流している。臨川寺以前の様子を伝える『往古諸郷館地之絵図』の芹川は、造路と大堰川の間で西へ方向を転じ、川端殿北辺を西流し、釈迦堂大路を横切ってさらに西方で大堰川に注いでいる。これらの絵図からは、臨川寺造営の際に、西流していた芹川の流路つけかえと同時に、付近の整地が行われたことも推定することができる。

今回の調査地内に芹川あるいはこれに関連する遺構を求めると、SD09・SD13 下層の溝状遺構が、平安時代以前の芹川の流れであった可能性があり、その痕跡と思われる。鎌倉時代には調査地の南方を西流するようになった芹川に、SD11 あるいは SD12 が注いでいたと推定することもできる。これらの溝と同時期の遺構はまったく検出されなかったが、遺物が上層から出土しているため、付近には川端殿に限らず、鎌倉時代の遺構の発見される可能性もある。

これらの溝がすべて埋没した後に堆積した第5層・第4層は、前述したように臨川寺造営に伴う整地層であった可能性があり、室町時代の遺構群がこの上面に形成されてゆく。主な遺構には、SD08・SK20 のような、溝とも土壇ともつかぬ形状を呈するもの、不定形な SK19・SK06 などの土器類を多く出土する土壇、SK45・SK46・SK01 など、瓦類を多量に出土する遺構がある。

SX01 は、軒瓦の出土状況から、臨川寺創建に近い時期の建立になる2棟の建物との関係が想定できる。土器類は SX01 埋没が15世紀後半頃であることを推定させ、瓦の磨滅が

著しい点は、建物の廃絶から SX01 に投棄されるまでにかかなりの時間が経過していたことを示している。これは、しいて文献記録と対応させるならば康安 (1361 ~ 1362) か永和 (1375 ~ 1379) 年間の臨川寺火災によって廃絶された建物の廃瓦が、応仁・文明 (1467 ~ 1469) の大乱後の整地の際にここに投棄されたものとも考え得る。

SX01 の埋没後に、SK45・SK46 が形成される。SK46 から出土した遺物は、甍瓦・伏間瓦・熨斗瓦・鬼瓦など、棟に使用する道具瓦と敷瓦が大半を占め、その他の瓦、土器類はわずかなことであることから、これらに対応する建築物を想定すると、瓦葺であったとは考え難く、鬼瓦もさほど大きなものではないので、柿葺あるいは桧皮葺の、たとえば門のような小さな建物であった可能性が高い。SK46 は埋土に焼土を多く含み、瓦類の出土状況からも、建物は近くにあつて、火災により廃絶し、比較的短期間のうちにここに廃棄されたと思われる。軒瓦からは建物の建立が 14 世紀末頃 ~ 15 世紀前半であること、土器類からは廃絶が 15 世紀後半頃であったと推定される。

調査区西部に分布する SK06・19・20 などは、14 世紀末 ~ 15 世紀前半頃の遺物を出土するため、SX01 対応建物が廃絶してから遺物が投棄されるまでの間に形成されたものであろう。また、SX46 対応建物の存続時期は、これらの土壌の形成された時期とほぼ一致するようである。SD08 はこれらの遺構より新しく、16 世紀前半頃の遺物を出土する。永正 6 年 (1509) の銘を有する硯は、この遺構面の上に堆積した第 3 層から検出されており、16 世紀前半がこの遺構面の下限であろうと思われる。

これら、室町時代の遺構のうちで、性格の明らかなものは少ないが、調査地は臨川寺旧境内の北東縁辺部であり、SX01 を区画を示す空堀状遺構と考えると、この区画外に廃棄場が分布し、近辺に門となるような建物の存在を想定しても良いのではないだろうか。

第 3 層堆積後、安土桃山時代には当地に土壇墓と推定されるものがいくつか営まれている。この墓域は、江戸時代 ~ 現代までほぼ継続するが、調査地付近が墓域となったのは、臨川寺の鬼門の方角にあたるためであろうか。芹川が臨川寺の東限を示すものであれば、これらの土壇は寺の境内に含まれることになるが、安土桃山時代以降の当地は、寺域外になったと考えるのが妥当であろう。

臨川寺創建当初の寺域は、瀬戸川 (旧芹川) 以西、釈迦堂大路 (朱雀大路) 以東、造路以南の大部分を占めていた。臨川寺付近の地割は、『嵯峨庄田図』から復原される条里地割を踏襲しており、寺の東・西・北を限る境界となった道や川も同じことがいえる。『嵯峨庄田図』の書かれた時期にはすでに庄田であったこの地が、皇室、女院と伝領され、や

がて臨川寺寺地となったのであるから、条里地割と寺の四至が一致しても不思議ではない。今回検出された遺構のうちにも、遺構の主軸が真北から西へ振れ、付近の地割と同方向の主軸をもつものが多くある。室町時代の推定溝状遺構 SX01 や、安土桃山～江戸時代後半の SD04 などとその代表的な例であり、当時においてもこの土地に、従来の地割に制約された区画が存在したことを示している。

今回の調査では明らかにすることができなかった平安時代～鎌倉時代についても、付近に荘園や川端殿関係の遺構の検出される可能性が大きく、臨川寺に関しても、中心部の伽藍や塔頭が調査されれば、これらとの関連において当地の性格も明確なものとなるであろう。これまでは臨川寺関係の遺跡の存在が主な問題であったが、今回の調査により臨川寺造営以前の遺構が確認されたことで、今後はそれを十分意識した調査計画を作成し、各時代の遺構が調査できる体制で臨む必要がある。

臨川寺旧境内の範囲は約 58,000 m²と推定されている。このうち、発掘調査の行われたのは 3,000 m²余りである。発掘調査の終了後、臨川寺関係の遺跡が現状でどのくらい破壊されているかを確認するため、その周辺も調査した。この結果、3 階建以上の建物で地下 1.5m 前後まで破壊された面積、ガソリンスタンドなどによって地下遺跡の破壊された面積を、調査終了面積に加えても推定旧境内面積の 1 割程度であることが判明した。しかし、すでに破壊されていても、現時点の地上で観察されないものもかなりあると思われ、実際は今回得られた数値よりは増加すると考えられる。また、臨川寺旧境内の残された 9 割近くの範囲に遺構が埋れているわけであるが、現実的には木造モルタル塗りの建物が立ち並び、調査が当分実施できない部分もかなりある。

今後の調査においては、これまでの臨川寺旧境内復原に主眼をおいた調査から一步進めて、それ以前の時代の荘園から離宮、寺院へと変遷していったこの地の歴史を包括した、総合的な調査計画が必要であろう。

表4 遺物観察表

図版番号 器種	器形	出土地点・層位	規 模 (cm)		類 例	備 考
			口 径	器 高		
E01	皿	SD09 淡緑灰色泥砂 (礫)	15.8	2.2		1/2 残存
C02	杯	SD13 暗褐色砂礫		2.8以上	3	1/5の小破片
C03	〃	SD09 淡緑灰色泥砂 (礫混)				1/2 残存 釉を施さないが、緑釉陶器に類似する器形。
G04		〃 〃				
G05		〃 〃				
C06	蓋	SD13 淡緑灰色泥土	15.8	2.5以上	1	1/4 残存 内面は磨滅している。つまみは欠失している。
A07	〃	SD13 黄褐色砂泥	24	4.0以上		1/20 残存
E08	鉢	〃 〃	16.0	7.0以上	4	1/6 残存
E09	皿 B	SK19	7.2	1.8		完形
E10	〃	SK06	6.4	2.0		〃
E11	〃	〃	8.2	1.9		完形 底部がわずかにくぼむ。
E12	〃	SX01	7.2	2.1		〃
E13	〃	SK20	7.2	1.8		〃
E14	〃	〃	7.8	2.3		〃 平底
E15	皿 A	SK19	12.0	2.8		1/3 残存 表面磨滅
E16	〃	SK20	13.0	2.8		〃
E17	〃	〃	13.5	2.8		1/2 残存 口縁に煤付着
E18	〃	SK08	14.6	2.5		2/3 残存
E19	〃	SK13	12.7	2.3		完形 口縁に煤付着
C20	椀	SK08	12.0	5.1以上		1/3 残存
C21	〃	〃	9.8	4.6以上		〃
P22	皿	B トレンチ 第2層	13.7	3.0		1/4 残存 口縁の破片がある。
P23	椀	〃 〃				〃
P24		SK10・SK47	12.4	4.6以上		1/3 残存 SK10 出土の破片と SK47 出土の破片が接合できた。
P25	椀	SK61	14.6	3.0		1/5 残存
P26	〃	SK08	14.2	4.4		1/2 残存 呉須は薄く、少し灰色がかっている。
P27	〃	B トレンチ 第2層	11.8	5.4		1/4 残存 伊万里焼 (18C)
P28	〃	A トレンチ 第2層			2	底部破片、オリーブ色の釉、胎土は暗灰色。竜泉窯系の青磁。
P29	〃	SK08	12.8	2.4		1/6 残存 全面に施釉。
P30	〃	SK08	13.4	6.6		底部及び口縁の1/10 残存、底部内面も花文を描く。
P31	鉢	B トレンチ 第2層	27.6	7.6		1/10 残存 高台部に砂粒が付着する。
C32	燭台	SK02	8.8	8.1以上		1/4 残存 上部は欠失
C33	皿	〃	10.6	2.2	3	1/2 残存 黄瀬戸。
C34	〃	SK08	11.8	1.9		1/3 残存 内面、体部、花卉状の文様を彫る。
C35	花瓶	SK02			1	底部破片 SX01 から類例出土。

図版番号 器種	器形	出土地点・層位	規模 (cm)		類例	備考
			口径	器高		
C36	壺	A トレンチ 第2層	5.6	3.4		1/2 残存、径は最大径。うすいムラのある灰釉。
Z37	香炉	” ”	10.0			
C38	”	SD06				
C39	”	SD04	13.4	8.1	3	1/2 残存 ”
C40	椀	B トレンチ 第2層	11.2	6.1		2/3 残存
C41	”	SX01	15.2	6.3 以上	1	” 古瀬戸。
C42	”	”	14.8 以上	4.6 以上	2	”
C43	”	”	22.0	9.2		1/15 残存。 ”
C44	鉢A	SK61	28.0	11.8	6	1/12 残存。
C45	”	B トレンチ 2層	30.0	7.5 以上		”
C46	”	A ” ”	27.96	6.0 以上	11	”
C47	”	A ” 4層	36.6	16.5		1/6 残存。
C48	鉢D	A ” ”	31.5	14.4	2	1/5 残存。
C49	鉢E	B ” ”	35.4	10.2 以上		小破片。
C50	鉢C	A ” ”	33.0	6.6 以上	5	”
C51	鉢B	SK20	30.0	12.0		4/5 残存。内面は使用により磨滅している。
C52	” B	A トレンチ 2層	27.0	7.2		小破片、小破片のため筋は残っていないが本来はあった。
C53	” B	A ” ”	30.0	11.5 以上		小破片と推定される。
C54	” B	SK02	29.4	6.6 以上	6	小破片
Z55	鉢E	第4層・第2層・第3層				他に直接接合できないが同一個体と思われる破片6。
Z56	” B		24.5		4	
Z57	” D		22.8	11.5		2/3 残存。
Z58	” A				2	
Z59	” A	SD08	43.0	13.0 以上	5	1/3 残存。脚のつく器形と考えられる。
Z60	” A		39.0	10.0 以上	4	1/6 残存。
Z61	” A		52.0	8.0 以上	1	1/15 小破片から復原。
Z62	” B				3	”
Z63	” F	B トレンチ 第2層				”
Z64	釜	A ” 第3層			2	”
Z65	”	A ” ”				”
Z66	鍋	A ” ”				”
Z67	燗台	SK46・第2層		6.4 以上		小破片(2片から成り立つ)一部炭素を吸着。
Z68	”	A トレンチ 第4層		8.3 以上		”
Z69	鉢F	A ” 第2層				小破片。波状の突帯、内外に朱漆付着(塗布したもの)
Z70	” G	SK20				小破片。透しがある。Z62 と類似。

PUBLICATIONS OF KYOTO ARCHAEOLOGICAL
RESEARCH INSTITUTE (INC.)

NO. 4

EXCAVATION ON SITE OF THE RINSEN-TENPLE (KYOTO)

ENGLISH SUMMARY

KYOTO ARCHAEOLOGICAL RESEARCH INSTITUTE (INC.)

1978

Content

Chapter I Research Work

1. Start of research work	1
2. Progress of research work	1
(1)Members of this excavation	1
(2)Progress of operations	2
3. History of this site	4
(1)History of the Rinsen-temple	4
(2)History and geography of this site	5
4. Past excavations	6

Chapter II Site

1. Stratum	11
2. Structural remains	12
(1)From Heian period to Kamakura period	13
(2)Muromachi period	13
(3)From Azuchi-Momoyama period to the first half of Edo period	15
(4)After the second half of Edo period	16
3. Conclusion	17

Chapter III Objects

1. Earthen wares	19
(1)Heian period	19
(2)Muromachi period	20
(3)Edo period	24
(4)Conclusion	24
2. Tiles	27
(1)Roof-end tiles	27
(2)Round and flat roof-tiles	34
(3)Special roof tiles	36
(4)Floor tiles	37
(5)Sealed tiles	39
(6)Conclusion	39
3. Stones and Metals	46
(1)Stone objects	46
(2)Metallic objects	47

Chapter IV Conclusion

English summary	53
-----------------------	----

Figurers and Diagrams in Text

1. Scene of the excavation	2
2. Scene of the excavation	3
3. Structural remains (Heian period ~ Kamakura period)	12
4. Sections-SD09 • SD13 (Southern half • Northern half)	12
5. SK06	13
6. Black earthenware (Pot • pan)	21
7. Rubbed Copies on black earthenware (all black bowl)	21
8. Stand (earthenware for lamp use)	21
9. Bottoms of potteries	22
10. Jar (SK41)	25
11. Diagrams on haji-type potteries	25
12. Roof-end round tile (Tokiwanakano-chō dwelling site)	27
13. Special roof round tile	34
14. Diagrams on roof-end round and round tiles	35
15. Robbed copies on roof flat tiles	36
16. Special roof tiles	36
17. Floor tiles (Square)	38
18. Floor tiles (triangle)	38
19. Ink stone, hand mill	46
20. Iron Knife, iron nails	47
21. Coins	47

Tables in Text

1. Structural remains	17
2. Sizes on roof end round tiles	32
3. Sizes on roof end flat tiles	33
4. Sizes on potteries	51.52

Frontispiece

1. Pictorial map of the palace 'Kameyama-Dono'
2. Pictorial map on the territory Ohi of the Rinsen temple

Plates (Photograph)

1. Aerial view
2. Site (general view)
3. 1) Trench A (West half) 2) SD08 • SK20
4. 1) Pits (modern ages) 2) Trench B
5. 1) SX01 2) SX01 3) SX01 (East-west section)
6. 1) SD11 2) SK10 3) SK20 4) SD08
7. 1) SK41 2) SK63 3) SK64 4) SK46 5) SK19
6) SK45

8. Objects Earthen wares (haji type potteries)
9. Earthen wares
10. Earthen wares (all black)
11. Earthen wares (ceramics)
12. Earthen wares (porcelain)
13. Roof-end tiles
14. Roof-end tiles
15. Roof-end tiles
16. Roof-end tiles
17. Roof-end tiles
18. Roof-end tiles
19. Roof tiles
20. Special roof tiles
21. Floor tiles
22. Floor tiles
23. Techniques on tiles
24. Tiles, Stone and Metallic objects

Plates (figure)

1. Site Surrounding map
2. General plan
3. Sections
4. Structural remains (SK46・10)
5. Structural remains (SK61, 62, 63, 64, SX02)
6. Earthen wares
7. Earthen wares
8. Roof-end tiles
9. Roof-end tiles
10. Roof-end tiles
11. Roof-end tiles
12. Roof-end tiles
13. Roof tiles
14. Ornamental tiles

This place located at *Saga-Tenryuji-Tsukurimichi-Chō*, *Ukyōku*, Kyōto City, was a detached palace of the emperor *Kameyama* called as *Kawabata-Dono* or *Kawabata-no Miya* where *Shōkei-monin Yoshiko*, an imperial princess, lived in. She adopted an imperial prince *Tokinaga* “世良親王”, a son of the emperor *Godaigo* “後醍醐天皇”, as her son and gave him this place. He would like to erect a temple of the Zen sect in this premise, but it was not built owing to his early death. The emperor *Godaigo* succeeded his dying wishes and appointed *Musō-Soseki* “夢窓疎石” the organizer to erect a temple called as *Reikizan Rinsenji* “靈龜山臨川寺”. *Musō-Kokushi* (the highest priest) “夢窓国師” founded the *Sannein* “三会院” in 1333, continuing to build a garden by himself and died at the *Sannein* in 1351. The *Rinsen*-temple is seen in records to have been burnt three times thereafter. The present *Rinsen*-temple is left over only a few buildings reconstructed afterwards and it's garden, too, has been changed into a bamboo grove on account of having been left as it is laid waste since the Meiji ages. Four excavations had been carried out since 1969 to 1976 and they enabled us to be unearthed structural remains and gardens looking to have been founded in the second quarter of the 14th century.

The distinct structural remains were not found at all on this excavation, but thirteen ditches, eighty pits and other three structural remains from the Heian period till modern ages were unearthed. Many tombs from Azuchi Momoyama period to Edo period unearthed are divided into two groups. One of which is the concentration of tombs with a long axis from the south to the north, another with a long one from the east to the west and a modern ditch is running as if it draws a line between these groups of tombs. Some pits of the Muromachi period seem to be for waste disposal divided into two kinds what include tiles chiefly and earthen wares, SX01 is a structural remain in the shape of ditch and in the character of a pit for waste disposal in which a great deal of tiles in the middle of the 14th century have been unearthed.

Principal relics unearthed by this survey were tiles, *Haji*-type potteries and ceramic wares, a majority of which belonged to the period from the middle of the 14th century to the 15th century. Besides a few ones made by the same mold as the flat roof-end-tiles unearthed mostly from structural remains by the former excavations in the precincts of *Rinsen*-temple “臨川寺”, there are several ones of the same figure as used at the *Tenryu*-temple “天龍寺” and the *Shōkoku*-temple “相国寺” among the tiles of the 14th century. There are some cases to have been unearthed as made by the same mold in the former precincts of the *Shōkoku*-temple and several other sites among the round roof-end-tiles of the 13th century.

Among Earthen wares and ceramic wares were several celadon porcelains imported from China which were relics of the 13th century, besides many *Haji*-type

potteries, koseto-type potteries and braziers of tile matter of the 15th century unearthed.

These relics are divided into the ones before the *Rinsen*-temple of the 13th century and the ones after the middle of the 14th century, that is to say, after foundation of the *Rinsen*-temple, Structural remains and relics clearly having a direct relation to the *Rinsen*-temple are until the middle of the 16th century and it might be thought that waste tiles and earthen wares of the buildings of the *Rinsen*-temple burnt down by several times of fires had been abandoned in this place.

The distinct structural remains were not any found, but these data will give us some idea of foundation of the *Rinsen*-temple, close relation with the later other temples of the Zen sect, circulation of commodity and the way that temples of Zen sect should be, going decline some day by means of being involved in the wars of *Ōnin* “応仁の乱”.